

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

体育心理学専門領域会報

第 38号 (通巻第 66号)

体育心理学専門領域

2026年8月発行

体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育心理学研究の発展のため、会員の研究発表の場を提供するとともに他の研究領域と融合した企画を推進し、会員の研究と実践の促進に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長1名
 - (2) 理事12名
 - (3) 監事2名
- 第6条 役員の選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に会員の中から理事2名を会長が委嘱することができる。
 - (3) 理事長は、理事の互選によって選出する。
 - (4) 事務局は理事長および庶務・会計担当理事で構成する。
 - (5) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 会長および理事の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、理事の2期目に理事長に選出された場合は3期を重任限度とする。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、広報委員会
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、原則として日本体育・スポーツ・健康学会大会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育・スポーツ・健康学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、4月1日より翌年の3月31日までとする。
- 第16条 本会の住所は事務局と同じとする。事務局の住所は別紙に定める。
- 附 則
1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
 2. 本会は、日本体育・スポーツ・健康学会の依頼により、日本体育・スポーツ・健康学会関連役員等を選出する。
 3. 平成24年4月1日より、日本体育学会（現日本体育・スポーツ・健康学会）が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称する。
- 1) この会則は、平成21年8月27日から施行する。
- 2) この改正会則は、平成29年9月10日から施行する。
- 3) この改正会則は、令和3年4月1日から施行する。

事務局所在地 福岡県宗像市赤間文教町 1-1 福岡教育大学 兄井 彰研究室
事務局担当 兄井 彰

体育心理学専門領域の役員

任 期：2025 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日

会 長：杉山佳生

理事長：兄井 彰

理 事：○國部雅大、土屋裕睦、奥村基生、雨宮 怜、煙山千尋（学会大会委員会）

○荒木香織、工藤和俊、渋谷崇行、村山孝之（広報委員会）

横山慶子（庶務担当）、幾留沙智（会計担当）

監 事：森 司朗、長谷川弓子

幹 事：小笠希将

○は委員長

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

体育心理学専門領域会報

第 38号 (通巻第 66号)

体育心理学専門領域

2026年8月発行

2026 年は、冬季五輪（ミラノ・コルティナ 2026 オリンピック）、WBC（2026 ワールド・ベースボール・クラシック）、サッカーW 杯（FIFA ワールドカップ 2026）と、数年に一度の国際的ビッグイベントが立て続けに開催され、慌ただしく過ぎていっています。この原稿を執筆している現在は、サッカーW 杯が佳境を迎えているところです。冬季五輪はともかく、WBC、サッカーW 杯では、日本代表チームは期待されていた結果は残せませんでした、多くの国民の関心を引いたといえます。特に、今回のサッカーW 杯は、スポーツ、あるいは、スポーツ科学・スポーツ心理学に携わる者に、多くの新たな課題を提示したのではないかと感じています。たとえば、目標設定のあり方（日本代表チームが、未達の「ベスト 8」ではなく、「優勝」を目指していたことは、果たして効果的だったのか）、長くなったアディショナルタイムへの対応（ディフェンスの集中力の持続問題）、判定へのテクノロジーの影響（VAR によるファウルの判定や、ボール内蔵センサーによるボールへの接触の有無の判断）、ハイドレーションブレイクの導入（試合形式の実質的な「クォーター化」）、「アラフォー」選手の間を見張る活躍（メッシやロナウド）、前例があまりないような規則の適用（レッドカード退場に伴う出場停止の猶予）、等々です。このような、競技そのものや、それを取り巻く環境の変化により、スポーツ科学のあり方も変わるため、私たちも、スポーツの研究や実践に新しい技術や考え方を導入し、また、それらを受け入れていく必要があるのですが、その一方で、「伝統」や「真理・普遍性」も疎かにするべきではないという思いにも囚われながら、試合を観戦している今日この頃です。

閑話休題、今年の日本体育・スポーツ・健康学会第 76 回大会は、北海道での開催（初日：札幌コンベンションセンター、2・3 日目：北翔大学）となります。大会のスケジュール構成が前年度からまたまた変更となり、初日の午後と 2 日目に、専門領域の企画が組み込まれることになりました。体育心理学専門領域では、8 月 31 日（月）の午後に「キーノートレクチャー1：身体活動・スポーツとレジリエンス（演者：上野雄己先生）」と「口頭発表」が、9 月 1 日（火）に「ポスター発表」、「総会」、「キーノートレクチャー2：狙う心理の解明を目指して―「狙い通り」をどう捉え、どう育てるか―（演者：長谷川弓子先生）」が行われます。もちろん、本学会の目玉でもある応用（領域横断）研究部会企画（テーマ別シンポジウム、口頭発表）も例年どおり実施されますが、今大会では、「会員企画」のセッションが新たに設けられました。体育心理学専門領域の会員の方々には、これらの企画のほとんどに何らかの形で関わっていただいておりますので、（時間帯が重なっているケースもありますが）お時間の許す範囲で、多くの企画にご参加いただければ、幸甚に存じます。

最後になりますが、現役員の任期は 2027 年 3 月末までとなります。また、会長の任期は 2 期までとなっていますので、今年度で、私はお役御免（強制退場）となります。この 4 年間、「総会での挨拶」を除いて、会長としての役目を十分に果たせたかどうかは甚だ疑問ではありますが、ご容赦いただければと存じます。次期役員（任期：2027 年 4 月～2029 年 3 月）は、本誌発行の頃には内定しているかと思いますが、本専門領域の運営や活動は、会員の皆様のお力添えがあってはじめて成り立つものですので、引き続きのご支援を、何卒よろしくお願い申し上げます。

体育心理学専門領域会報 第38号

目次

巻頭言	i
-----------	---

目次	ii
----------	----

I. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会関連

1. 専門領域別

1) キーノート

(1) レクチャー1

題 名：アスリートの競技体験における心理的発達

司 会：中込四郎（筑波大学・つくば木の花クリニック） 1

演 者：江田香織（東洋大学） 2

傍聴記：若月 翼（東京農工大学） 3

(2) レクチャー2

題 名：運動部活動における適応と暴力 —心理社会的アプローチと実践の方向性—

司 会：土屋裕睦（大阪体育大学） 4

演 者：渋谷崇行（桐蔭横浜大学大学院） 5

傍聴記：渡邊 諒（鹿屋体育大学） 6

2) 口頭発表

座 長：長谷川弓子（岩手大学） 7

座 長：山本浩二（関西福祉大学） 8

3) ポスター発表記

発表者1：相川 聖（関西学院大学） 9

発表者2：村上宏樹（金城大学） 10

2. テーマ別（各研究部会）

1) テーマ別シンポジウム（部会員、演者報告）

(1) スポーツ文化研究部会

部会員：沖 和砂（会津大学） 11

(2) 学校保健体育研究部会

部会員：木島章文（山梨大学） 12

(3) 競技スポーツ研究部会

部会員・シンポジウム演者：筒井 香（株式会社 Borderless） 13

(4) 生涯スポーツ研究部会

部会員：田中美吏（武庫川女子大学） 14

(5) 健康福祉研究部会

部会員：樋口貴広（東京都立大学） 15

2) テーマ別研究発表

山田弥生子（追手門学院大学） 16

鈴木利也（石川県ラグビーフットボール協会） 17

小塩靖崇（東京大学） 18

脇 遼太郎（東京都立大学・院） 19

3) 大会参加記	
上野壮士郎（筑波大学・院）	20
前田凌汰（大阪体育大学・院）	21
II. 研究会の活動報告	
運動学習研究会（平田智秋）	22
日本スポーツ視覚研究会（樋口貴広）	23
セーフスポーツ研究会（豊田 隼）	24
スポーツ動機づけ研究会（藤田 勉）	25
III. 研究室紹介	
研究室紹介：小菅（町田）萌（大阪体育大学）	26
IV. サテライト企画：学位論文発表	
古川大晃（京都工芸繊維大学）	27
小笠原佑衣（大阪公立大学）	28
V. 学位論文紹介	
加畑 碧（筑波大学）	29
川部幸也（中京大学）	30
小嶋 岳（大阪体育大学）	31
周藤玲奈（広島大学）	32
田島勇人（日本大学）	33
鳥井淳貴（宝塚医療大学）	34
VI. 海外情報	
小嶋 岳（大阪体育大学）	35
VII. 事務局報告	
2025(R7)年度体育心理学専門領域第2回理事会議事録	36
2025(R7)年度体育心理学専門領域総会議事録	37
2026(R8)年度体育心理学専門領域第1回理事会議事録	43
2025(R7)年度決算報告書	44
2026(R8)年度予算案	45
VIII. 編集後記	
荒木香織（順天堂大学・(株)CORAZON, 広報委員長）	46

I. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会関連

司会報告
アスリートの競技体験における心理的発達

中込四郎（筑波大学名誉教授、つくば木の花クリニック）

私は筑波大学博士後期課程体育科学専攻に江田さんが在学していた時の主指導教員であり、また共同研究者でもあったことから、レクチャーに先立ちかなり私的な思いを込めて講師紹介をさせていただきました。その中では先生ご自身の幼少期から始めた競泳選手としての長期にわたる高度な競技スポーツ経験や活躍と、臨床心理士の資格取得を目指した養成過程での専門的トレーニングやその後のアスリートの心理サポートにおいては、自分に向き合うような内的作業が繰り返し求められ、そのことが先生の研究課題に繋がっていったのではないかと受け止めています。それは、「自身の心理発達やパーソナリティ形成に競泳経験がどのように繋がり、今を形作ってきたのか、自身にとってどのような意味があったのか」などと問いかけて続けたのではないかと想像してみました。そこでは内的必然性を感じるのでした。

先生の研究課題は、私の遠い昔の学生時代の体育・スポーツ心理学領域では、“スポーツ経験とパーソナリティ形成”といったタイトルで大きく括られ、国内外の当時のテキストでは必ず“スポーツ経験とパーソナリティ形成・発達”といった章立てが認められました。ところが、今日ではそうした章立てを見ることがなくなってしまいました。その理由はさまざま考えられますが、そのうちの1つには、心の発達・変容やパーソナリティ形成に係る従来の研究方法の限界があったのではないかと思います。しかし、スポーツ経験が私たちのこころの発達、特にパーソナリティ形成にどのような関わりを持っているのかについて、実証的な確かめに基づいて主張していくことは今でも重要な課題となっています。江田先生の今日までのアスリートの心理臨床に基づいた研究は、新たなアプローチによる「古くて新しい研究課題」への真正面からの取り組みと考えられます。

心理的問題を訴え相談室を訪れるアスリートには、それまでの＜過去の＞競技経験での特異な歩みが認められ、そこでの経験が主訴の背景にある取り組むべき心理的課題を示唆します。それゆえ競技経験によるパーソナリティ形成・発達の問題に取り組む際には生涯発達の視点を持つことが欠かせません。このことは技術体力面の指導においても「今何ができるかよりも、今何をしておくべきか」を大切にしなければならないと言われているのと同様です。

そして、先生はアスリートの臨床を通じた競技体験の独自性についても言及されていました。例えば、新たな技の獲得や記録向上の達成過程そして勝利経験等はこころの深い体験となり、発達刺激として他にはない特異なものとなる可能性を指摘していました。しかし、先生が相談室で出会うアスリートたちからはそれらが発達刺激となり得なかった現実を突きつけられ、「どのような体験様式がどのように心理発達を促すのか明らかにすることで、競技力向上と共に心理発達を実現するのではないか」とも述べていました。今後はこうした問いに答えていくことが、身体経験による独自のこころの発達理論の提案につながっていくものと期待されます。体育・スポーツ心理学領域からアスリ

ートや運動愛好家の体験に迫り、こころの成長プロセスに身体活動の果たす役割やそこでの心理的機序等の解明が課題となっているようです。江田先生はレクチャーの中で競技経験が自己形成につながる一つの体験の有り様として“対話的競技体験”を措定し、それを通して、体験への信頼、主体的関わり、自分自身に向き合う、気づき・洞察といった4つの側面が促されると主張していました。

上述のような主張の確かめには従来の質問紙法や調査面接を越えた、研究協力者である対象者（アスリート）の体験に深く迫る必要があるのです。筆者がスポーツ心理学に“臨床”という言葉冠して“臨床スポーツ心理学”を提案した背景には、対象者の“床に臨む”ような＜ベッドサイドの＞近い距離で関わり、支援しながら研究を進めていく方法が必要との思いがありました。そして単なる心理サポート事例の報告として終わらないよう、競技スポーツの現場指導者へ提言できるような取り組みが必要とも考えました。

先生は心理臨床において、アスリートを中心にジュニア期からシニア期まで幅広く歩まれるのだらうと思っています。それらを通して“現在は過去と未来の結節点である”といった理解や関わり方を実感されるのではないかと思います。先生には、今後も対話的競技体験を通して、他にはないアスリートの心理的発達を実現していくスポーツ経験が、競技力向上や実力発揮にもつながっている事実を裏付けて欲しいのです。

アスリートにはパフォーマンス向上（現実適応）と心理発達（個性化）といった2つの課題があります。両者は二律背反として受け止められることがあるのですが、筆者は両者が両輪であり裏付けの関係にあると考えています。パフォーマンスの向上には心理面の充実が求められ、そしてアスリートの場合は競技への取り組みが心理発達に、心理発達が競技面の向上に繋がる。そうした可能性や期待があるものの、残念ながら相談室を訪れるアスリートからは、競技生活での現実適応への偏りが認められることが多い。江田先生はレクチャーの中で“過剰適応”といった考え方で説明をされていたように記憶しています。今後も“スポーツ経験とパーソナリティ形成・発達”といった古典的なテーマに対して新しい取り組みの流れを引き起こしていただき、そのことで事例研究に対する周囲の受け止め方を変えていただけることを期待しています。

著者略歴：東京教育大学大学院修士課程体育学研究科を修了後、45年間大学教員としてお世話になり、現在はつくば市内の精神科クリニックでのカウンセリング業務のほか、オンラインでのカウンセリングや個人SVを行なっています。学生時代の伝統的なスポーツ心理学における研究課題や方法からはみ出し、同級生の鈴木壮君（岐阜大学名誉教授・現在は中部学院大学）からの協力を得ながら二人で“臨床スポーツ心理学”の輪郭を描くまでに漕ぎ着けました。

日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会において、体育心理学専門領域のキーノートレクチャーを担当させていただきました。このような貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございます。ご配慮いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

本キーノートレクチャーのご依頼をいただいた際、何をどのように発表するのか、非常に悩みましたが、これまで取り組んできた私自身の研究およびアスリートの心理支援（以下臨床経験）に関わってきた20年ほどを振り返り、発表させていただきました。私自身は研究においても臨床経験においても、「体験」を基盤にして歩んでまいりました。当日、司会の中込四郎先生（筑波大学名誉教授）よりご紹介いただきましたように、私の研究への関心は自身の競泳選手としての競技経験に基づくものであり、また臨床経験においても、自身の競技経験および臨床心理士としての経験、そしてアスリートの心理支援に関わる中で体験してきたことから始まっております。体育・スポーツ科学という文脈において、どこまで個人の経験を基にしていくことが望ましいのかについては賛否あるかと思いますが、しかし近年の対話的自己論の枠組みにおいて Henry (2025) は、本来感（真正性）を動的・状況依存的な現象として解明するための鍵として位置づけ、主観性を『バイアス』ではなく研究の仮説生成やエビデンス構築のツールとして活用する価値を示唆しています。この立場から、私の競技経験を背景として記述し、研究と実践の橋渡しに活かしたいと考えます。

【私自身の競技経験】 私自身の競技経験は非常に偏っており、競技経験を通して心理的に発達できたのか、疑問が残りました。私だけでなく、周囲の友人たちは過呼吸に始まり、様々な心身の不調を抱えながら競技に向き合っているように見えました。しかし一方で、「では競技経験は心理的発達を阻害するのか」と問われると、答えに困りました。そうとも言い切れないように感じたためです。

【競技力向上と心理的発達をともに実現する競技経験】

そこで研究においては、「競技力向上と心理的発達をともに実現する競技経験とは何か」という問いを立て、臨床においては、そのような体験を賦活化させることを自身の課題として抱え、今日まで歩んでまいりました。広い意味では私の研究はパーソナリティ研究に分類されると思いますが、従来の研究は競技経験の体験にあまり焦点が当たっておらず、それゆえに私自身の研究や臨床の問いに応えるものはわずかでした。理論や概念はたくさんありましたが、それらを臨床に落とし込んでいくと、何をすべきなのか、どう関わるべきなのかが分かりませんでした。パフォーマンスの向上と心理的発達の両者をともに実現していると考えられるアスリートの体験を探ることにより、パフォーマンス向上と心理的発達をともに実現する競技経験が明らかになると考え、研究を行いました。具体的には、大学生アスリートを対象とした量的調査と質的インタビューを実施しました。その結果、「対話的競技体験」を指定しました。

【対話的競技体験】 対話的競技体験を「競技経験を通し

て自身と向き合う体験様式」と定義しましたが、非常に分かりづらいというご指摘をしばしばいただきます。一つには私の説明不足もあるかと思いますが、もう一つには、体験を語ることの難しさがあるように思います。この体験様式は Hermans (1992) の対話的自己論に基づき、自己を「複数のポジション (positions) と声 (voices) からなる対話的空間」として捉え、様々な経験の中でこれらのポジション間の対話を通じて体験を深め、心理的発達を促すことをモデルにしております。アスリートの場合には、この経験が競技における身体を通して行われると考え、対話的競技体験を指定しました。競技経験には様々な経験がありますが、いずれの経験も体験の仕方によっては、自分自身と向き合い、心理的発達につながる経験になり得ると考えます。

【アスリートの思春期から青年期への移行の難しさ】

このような体験は、アイデンティティの獲得が発達課題となる青年期に特に必要となりますが、青年期になってから突然できるようになるわけではなく、その発達のプロセスにおいて、少しずつできるようになっていくことが必要だと考えられます。その理由は、青年期アスリートの心理支援において、対話的競技体験に向き合う体験様式に変容していくことは非常に難しく、実現には長期間を要するためです。

また、青年期以前のアスリートの心理的発達については、十分な研究や臨床的な知見が得られなかったため、筆者らは思春期世代のアスリートの相談事例を分析し、彼らに特徴的な4つの心理的課題：①身体的変化への気づきに苦さ、②「当たり前」にできていた力の喪失感、③支えとなる存在の不在、④競技への過剰適応を明らかにしました（江田ほか、2017）。これらの課題は、思春期アスリートの心理的発達プロセスにおいて、児童期の勤勉性の課題から、思春期に必要な自分探しの試行錯誤経験を経ずにアスリートとしてのアイデンティティ（スポーツマン的同一性）を獲得することを示唆していると考えられます。そのため、思春期世代のアスリートに対する心理支援においては、彼らが自由に自分探しに取り組めるような環境や働きかけが必要であると考えられます。

本発表でご説明した研究は日々の臨床経験において、筆者自身の取り組みに色濃く反映されており、研究と臨床の往還を日々積み重ねております。発表の最後に取り上げましたように、今後も「体験」に基づく研究と臨床を続け、1事例を丁寧に分析し、心の変化に関わっていきたいと思っております。

著者略歴：筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程修了。博士（体育科学）。筑波大学および国立スポーツ科学センターでの心理支援を経験。競技における心理支援とその研究を中心に活動。近年は思春期世代のアスリートに対する心理支援についての研究および実践を中心に活動しています。

傍聴記

江田香織先生（東洋大学）による「アスリートの競技体験における心理的発達」を拝聴して
～ケーススタディの重要性を考える～

若月 翼（東京農工大学）

大会初日の比較的早い時間帯でしたが、メンタル・臨床系の先生方に限らず数多くの傍聴者が訪れ、大教室は超満員となりました。欺く言う私も専門は運動制御・学習系で、予備知識など皆無でしたが、江田先生の大変丁寧なプレゼンテーションにより分かっている気持ちを味わわせていただきました。しかしここでは知ったかぶりはせず、拝聴しながら考えたことを中心に記録しようと思います。

さて、本講演は江田先生の実験者としての立場とお考えの明言からスタートしました。江田先生のご研究は、ご自身の豊富な競技経験から生じた、「一見澆刺としているアスリートの心は必ずしも健康ではない、むしろ不健康である」という、アスリートのイメージと実際の間にある差異への興味が発端になったと言います。この違和感は、自分なりに一生懸命競技に打ち込んできた私も激しく賛同するところでした。1964年の東京オリンピックで男子マラソン銅メダルを獲得した円谷幸吉が自ら命を絶った例は、まさにこれを象徴する悲劇と言えます。江田先生のお話を聞きながら、そもそもなぜアスリートの心は強いと思われているのか考えていました。例えば、逆境を乗り越えたアスリートばかりが報じられれば（メディア・バイアス）、周囲はそれを“アスリートの典型像”として形作るでしょうし、ソーンダイクのハロー効果から見れば、顕著な特徴（ここでは身体能力）に引きずられて他の特徴（ここでは心の強さ）についての評価が歪められるでしょう。このように、いくつかの認知的なバイアスが絡み合うことで生み出されている仮想像であるように思えます。

さて、メンタルヘルスの問題は症状が明確に露呈するため、リテラシー教育や心理スキル教育による対処が急がれる傾向にあります。江田先生はそれに対して二点問題提起をされました。第一に短期的な介入や環境調整では本質的な問題解決にはならないこと、第二にアスリート特有の時間的・環境的な制限があることです。そこで、アスリートが競技を通じてどのような体験をしているのか、競技経験がどのようになされていくのかなど、アスリートが直面する問題の本質を丁寧に分析し、心理的発達の側面からアプローチする手法を考えられたとのこと。そしてその研究対象は、私は何者かという疑問に直面しアイデンティティを獲得していく青年期（13-22歳）から成人期（23-34歳）、つまり大人になっていく過程です。若い頃から競技に専心していると、場合によっては学校に行かずに練習や大会に行かなくてはならず競技以外への視野が狭まったり、進学先や就職先の選択は本来自分自身と向き合う機会であるはずが、競技力向上を最優先させて将来について深く考えたり悩むことなく決定してしまうといったことが起こります。一方で、競技経験がデメリットばかりであるはずもなく、新しいワザを習得したり記録を向上させていく経験は、効力感や達成感を与えます。精神や時間を一つのことに注ぎ尽くすという経験は、大人になってからだと然う

然うできる経験ではありません。このようなメリットとデメリットの分析から、江田先生は競技経験を、幅としては狭くとも深く他では得られない貴重な体験として心理的発達に役立つものと考えられています。スポーツとの関わり方を工夫することで、デメリットがメリットに変わりうるというモチベーションです。スポーツへの正しい関わり方を探索する手法として、基本的には悩みを抱えているアスリートとの対談が用いられ、本レクチャーではその内2件の事例が紹介されました。江田先生はそれらのカウンセリングから“対話的競技体験”と呼ばれる体験様式を考案しており、特に「自分自身と向き合う体験」をしているアスリートは競技経験による心理的発達が実現している傾向にあると言います。

またに変えて、江田先生は自ら「臨床系事例研究は科学か？」という極めて重要な問いかけをされ、個人的には、これが本レクチャーのハイライトだったように思います。これまで経験された数多くのカウンセリングの中で、非常に似たパターンでも全く同じアプローチで成功したケースは一つもないそうです。これは通常のカウンセリングも同じことかと思いますが、スポーツという特殊な状況から生じた症状に対しては、その傾向はより一層強まりそうです。つまりそこには科学研究の原則の一つである“再現性”の破綻があります。この問いに対して江田先生は、「ある特性や個性に限定して再現できるという点では再現性がある（＝科学）と言えるのではないか？」とされました。科学研究では、ゴールにモデル化を据えることが多くあります。私も明らかにしたい事象を抽象化し、最終的にモデル化するフェーズに魅力を感じています。しかしその一方で、モデル化の過程で多くの要素や条件を削ぎ落としていることを忘れてはいけません。再現性や統計的な信憑性に関係なく、「こんな例があった」という事実は貴重な報告として扱われるべきだと考えます。十分な統計的検定力を満たすために膨大な量のデータを取得する研究が一般的とされる昨今、目の前のアスリートを被験者ではなく来談者として扱い、その来談者の抱える問題を一つ一つ丁寧に読み解いていく江田先生の取り組みは、研究者が忘れてはならない誠実に溢れた素敵なお研究だと思います。

著者略歴：2017年中京大学スポーツ科学部卒業。2021年中京大学大学院体育学研究科博士後期課程修了。博士（体育学）。2023年より東京農工大学大学院工学研究院先端健康科学部門助教。現在は、量子力学の観点からみたスポーツ、生身の他者運動観察、身体性知能によるスポーツの再定義、などに興味を持って研究を進めている。



演者である渋谷崇行先生は第 71 回全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園）に投手で四番打者として出場した経験のある、異色の体育・スポーツ心理学者。元エリート球児はその後、日本大学文理学部へ進み、卒業後は新潟大学大学院教育学研究科修了、そして名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士（後期）課程にて、博士（心理学）を取得している。研究テーマは部員の心理的ストレスやライフスキルに焦点をあてたもので、本専門領域の中核的なテーマでもあるスポーツにおける人格形成と密接に関連した内容となっている。今回のレクチャーの前半において、渋谷先生は「運動部活動の光と影」と題して、様々な研究成果をご報告頂いたが、部活動において辛く苦しい鍛錬や、理不尽な指導の先に甲子園出場と言う輝かしい体験をした元球児の、人生の答え合わせのような内容を含んでいるように感じたのは筆者だけであろうか。

渋谷先生は、桐蔭横浜大学で教授としてスポーツ心理学を講じる傍ら、Sport for Kids Japan という一般社団法人を立ち上げ、国内外の青少年スポーツの振興と発展と青少年スポーツ指導者の資質向上に取り組んでいる。この法人の設立には、2012 年末に日本のスポーツ界を揺るがせた体罰問題がきっかけになっていると言う。当時、文部科学大臣をして「日本のスポーツ史上最大の危機」と言わしめる事態に直面し、本学会も理事会として緊急声明を発出したり、各専門領域で研究知見を出し合って社会に向けて発信したりした。筆者も、学会理事会におかれた大学体育問題特別委員会に所属し、体育・スポーツ心理学の視点から体罰・ハラスメントの根絶を訴えたが、渋谷先生は学術界のみにとどまらず、自ら現場に出向いて、この問題の根絶を訴え続けている。その特徴は、今回レクチャーで紹介された研究成果に基づき、スポーツ指導における体罰やハラスメントの根絶を目指すための、様々な研修プログラムを準備して、全国各地で実践をされている点にある。特筆すべき点は、その対象が指導者養成のみならず、保護者への啓発活動などを行っている点にある。同時に自己研鑽にも余念なく、日本スポーツ協会の公認コーチ養成を担当する講師である、コーチデベロッパー（コーチのコーチ）にも認定されており、体罰・ハラスメントの根絶と同時に、グッドコーチの養成にも献身されている。同じくコーチデベロッパーである筆者とは、全国各地の研修会場でともにファシリテーターとして一緒にすることも多く、静かで謙虚な語り口の中に、研究に裏付けられた熱く強固な信念を垣間見ることがある。本レクチャーではその信念を、「チルドレンファースト・スポーツセカンド」と表現されており、スポーツで子どもたちが傷ついたり、危険な目に合ったりすることは断じてあってはならないという強い思いが語られた。これは、エリート高校球児として、辛い練習に耐え、理不尽な指導を受けた経験のある渋谷先生だからこその、勝利至上主義への警鐘とセーフスポーツへの憧憬と受け止めるのが良いだろう。特にセーフスポーツは、2025 年のスポーツ基本法の改正を受け、今後スポーツ界において重要なキ

ーワードになると思われ、体罰・ハラスメント問題の他に、虐待や差別の根絶、誹謗中傷対策が急務の中、本専門領域も研究・実践の両面から貢献していくことが求められるだろう。

一方、体育・スポーツ心理学領域におけるこれまでの研究、とりわけスポーツと人格形成の視点から考えると、スポーツで体験する様々な心理ストレスは、個人の成長を促し、例えば部活動への適応にポジティブに影響することもあると考えられる。もしかすると優勝劣敗など、一見過酷に思えるストレス状況も、指導者の支援や環境調整などがなされれば、プレーヤーの人間的な成長の場になることもあるだろう。この点について渋谷先生のご研究では、「部活動ストレス―適応モデル」を提案しており、部活動で体験する心理的ストレスへの、様々な対処経験を通じて、心理・社会的スキルの獲得がなされ、適応が図られるといった考察がなされていた。人格形成や人間的成長については様々な考え方ができると思われるが、心理的ストレスと、より自分らしく生きるための心理的スキル（ライフスキル）の 2 つの視点から捉えることで、より良いスポーツ環境が浮き彫りになってくるだろう。心理的ストレスのポジティブな効果はセーフスポーツあってこそと考えれば合点がいき、これも渋谷先生の研究の成果の重要な部分であると思われる。また渋谷先生は不適切指導の傾向が感じられる指導者に対して、単にその非を責めるだけではなく、そこに潜む構造について、心理・社会的な側面から分析し、加害者にさせないためにどうすればよいのかを検討する、冷静な科学者の目も持ち合わせている。指導者養成の現場で一緒にしていると、不正のトライアングルを例に、「機会・動機・正当化」を生じさせないような環境構築のための議論を推奨されることがあった。本レクチャーでも、日本のスポーツ文化や商業的なマスコミの姿勢を課題として取り上げられており、指導者の内的な資質能力といった狭い範囲の議論に留まることなく、大きな社会的文脈でこの問題を捉えることの大切さも、このキーノートから学ぶべき事柄だと記銘しておきたい。

本レクチャーを通じて、体育・スポーツ心理学に携わる私たち体育心理専門領域の会員が果たすべき役割について、改めて様々な視点から考える機会を頂いたことに、心より感謝を申し上げたい。

著者略歴：土屋裕睦（つちやひろのぶ）。大阪体育大学教授。博士（体育科学）。公認心理師、スポーツメンタルトレーニング上級指導士。JSPO コーチトレーナー、「NO! スポハラ」実行委員。JOC アントラージュ部会員。著書に「アスリートのこころの強化書」（草思社）他多数。日本スポーツ心理学会会長、剣道教士七段。



「なぜスポーツにおける暴力をなくさなくてはいけないのか？」あなたはこの問いに対してどのように答えるであろう。「スポーツの高潔性を保つため」「時代に応じた指導をするため」「選手に主体性を持たせ練習を効果的にするため」、あげられる多くの回答は、スポーツの発展を願う私たちの極めて素直な意見である。それでは、「なぜスポーツにおける暴力はなくなるのか？」関係各所は様々な試みを行っている。はたしてその実践は効果的なのか、あるいはそのための研究上の課題は何かということを知りたいと考えた。

【ストーリー】運動部活動における適応と暴力をテーマとして掲げたのは、私自身が長く関心を抱き続けてきたからに他ならない。その原点には私のスポーツ経験がある。小学生以前のスポーツは自尊感情を高めてくれる自己表現の機会であった。中学生となり暴力を目の当たりにした野球少年は「強くなるために暴力は必要なのだ」と考えるようになる。競技性がさらに高まる高校時代は暴力を許容し、甲子園を成し遂げた自身が有するスポーツ観は「蹴られ殴られ理不尽なことにも耐えるのがスポーツ」であった。ところが、大学生になってスポーツは楽しいものだと思われ、にわかには受け入れ難かったが、やがてそのことが理解できるようになる。そうすると関心の矛先は自分に向けられる。目指した甲子園の意味は何だったのか。自らが経験したスポーツの答え合わせをしたかった。研究を志す理由は明確になった。

【運動部活動の光と影】運動部活動は参加者の現在と将来における健康を実現する機会として重要な役割を担っており、そこでの経験が個人の幸福（well-being）に及ぼす影響は極めて大きい。しかし、部員とスポーツとの関係の持ち方によっては、そのような運動部活動の効果を得られないどころか、心身の健康を脅かす様々な不利益を被る可能性がある。運動部活動において部員が不適応を呈するという事は、運動部活動の意義からかけ離れているといわざるを得ない。しかし、部員が生涯に渡る健康を実現するための機会が運動部活動に内在していると考えれば、たとえ運動部活動がストレスを含む活動であったとしても、部員はたくましく運動部活動に取り組み、指導者や仲間との人間関係を経験しながら、個人の欲求充足や自己実現に向かって活動を行うことに価値を見出せる。筆者がこれまでに取り組んできた心理的ストレス研究の最大の関心は、部員が不適応を起こすことなく運動部活動の環境に適応することであった。一連の研究を通じて心理的ストレスのネガティブとポジティブの両側面を包含する「部活動ストレス―適応モデル」を作成した。このモデルでは、部活動におけるストレスを単なる解消されるべき対象ではなく、ストレスとの関係によっては個人の成長を介して適応をもたらすものであると捉えられた。そして、モデルに依拠した部員用のストレスマネジメントプログラムを作成、実施した。

【運動部活動における暴力に関する研究の成果と課題】2020年7月に発表されたヒューマン・ライツ・ウォッチの

報告は衝撃であった。日本では2013年以降、スポーツにおける子供への暴行・暴言等の虐待は減っていると受け止められてきたが、報告が投げかけたメッセージは「あなた方は現実を見ようとしていない」であった。現在までに行われてきた暴力に関わる研究には、内的要因であるコーチに焦点を当てた研究、外的要因である選手や保護者に焦点を当てた研究、さらに周辺環境である集団や発生状況の特性に焦点を当てた研究などがある。コーチから受けた暴力を許容し効果があったと考え肯定する選手は一定程度存在することが指摘されている。そして、そのような選手時代の経験がコーチとしての将来の暴力を予測するということも指摘された。研究の成果を実践に活かすならば、特に予防の観点から研修プログラムの作成に役立てられる。コーチ対象の研修会は現在でも行われているが、今後は選手対象や保護者対象の研修も必要性が高まるであろう。コーチ養成の観点からは、女性や非暴力経験者が積極的に登用される体制づくりにも注目したい。

このように、心理社会的視点から暴力発生のメカニズム解明に向けた知見は積み上げられつつある。しかし、暴力行為が人間の行動であるならば、より「大きな文脈」における検討も必要である。例えば、学校の運営方針や競技団体のコーチ育成システムを研究の対象としたい。システムや制度の不備、欠陥が暴力を生じさせていることに対して心理学的なアプローチは重要である。また、日本のスポーツ界や社会全体にある文化的な規範はコーチ行動に影響を及ぼす。社会は青少年スポーツにどのような姿を期待するのか。商業主義的なマスコミの報道は国民にどのように解釈されるのか。そこにスポーツの普遍的価値は枠組みとしてあるのか。そのためのリテラシー教育はどのようになされるべきか。研究的な問いは止まらない。

【暴力の根絶に向けた実践の方向性】生態学的モデルに基づく多層的なアプローチが不可欠である。「個人」「対人関係」「組織・コミュニティ」「政策・社会」の各レベルで要因を特定し、それらの相互作用によるコーチ行動の全容理解を進めたい。特に、組織・コミュニティレベル、政策・社会レベルにおける心理学的研究は期待される。加えて、各レベルの要因を統合的に検証する学際的研究、介入実践の効果継続的に評価する実証的研究も重要である。

「なぜスポーツにおける暴力をなくさなくてはいけないのか？」以前の私なら「スポーツをよくする」ためと答えていたであろう。しかし、そのような悠長なことを言っている場合ではない。スポーツで子供が命を落としたり、心身に大きな痛手を負っていたりする。刃物と同様に使い方を誤ったスポーツの危険性は計り知れない。私たちは「子供を守る」ためにスポーツの適切な用法を学ぶ必要がある。あえて序列をつけるのであれば、私自身は「チルドレンファースト・スポーツセカンド」の意識を持ちたい。

著者略歴：名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士（後期）課程修了。博士（心理学）。

筆者は、2025年8月29日に行われた渋谷先生のキーノートレクチャー「運動部活動における適応と暴力―心理社会的アプローチと実践の方向性―」を拝聴した。本レクチャーに参加し、渋谷先生のご発表を聞いて感じたことや自身の中に生じた心理的变化を、傍聴記としてここに記したい。

レクチャーの骨子は、渋谷先生が述べられた「個々の研究者が、暴力問題の根絶に向けた実践の主体として何を考えるのか（実践できるのか）」であった。渋谷先生は、スポーツ部活動の現場で生じる暴力問題の解決に向けた活動について、「運動部活動の光と影」、「運動部活動における暴力に関する研究成果と課題」、「暴力の根絶に向けた実践の方向性」という3つの話題をテーマに、ご自身の行ってきた研究や活動、そこから得られた実践者としての教訓を語ってくださった。

レクチャーでははじめに、運動部活動がもつ理念、子供たちが部活動に参加することで得られる経験、その弊害について基礎知識をご紹介いただくとともに、先生自身が研究者としてこれまで行ってきた研究知見を紹介いただいた。研究の話題として、運動部活動における心理社会的スキルが日常生活にどのように汎化するか、および、運動部活動生徒がストレスマネジメントをどのように行うべきかについて解説いただいた。特に、部活動中に生じる様々なストレスに対して、生徒がどのような焦点化（問題焦点的、情動焦点的）によって対処するのかで、ストレスの感受の仕方が変わるという知見は、部活動中におこる様々なストレスへの対処、部活動への不適応を防ぐうえでの重要な示唆になると感じた。

2012-2013年、立て続けに報道されたスポーツの暴力事件問題（女子柔道において、指導者が選手に対する暴力をおこなった事件、部活動で指導者から受けた暴力によって生徒が自殺した事件）が生じた。この出来事は渋谷先生自身においても、研究知見の構築によりスポーツの教育に貢献できていると感じているという実感を打ち砕かれるような大きな出来事であったという。研究者として、実践現場において必要な活動（理論知と実践の橋渡し）を行う必要があると認識させられた出来事であったと語られた。

レクチャーの後半では、実際に渋谷先生先生が行われている、研究と現場の橋渡し活動を紹介いただいた。渋谷先生は、一般社団法人スポーツフォーキッズジャパンを設立し、そこでスポーツ指導者に研究知見を届ける研修制度の整備や、現場の声を学術領域にもフィードバックするといった活動に取り組まれてきたという。筆者にとって印象的であったのは、暴力問題の講習会を開催したり、広報活動を行ったとしても、その声が本当にその声かけが必要な現場（指導者や生徒）に届きづらいということであった。暴力問題の当事者は、実際には自分達が当事者であるという問題意識を有していないケースや、講習会などの場には参加していないケースが多いだろう。また、大きな問題が発

生するまで、周りの意見が当人に聞き入れてもらえないといったことが起こることも容易に想像つく。本当に声を届けるべき人達に、どのようにアプローチし、好転的な行動へつなげていくのかを考えることが、実際の現場にある課題なのだと、レクチャーを拝聴して感じた。

レクチャーの最後には、研究、実践活動を通して「スポーツチルドレンファースト・スポーツセカンド」の理念を浸透させることが、暴力の根絶において大切であると、渋谷先生は述べられた。部活動スポーツにおける勝利の過度な追及に対して警鐘をならすとともに、スポーツ部活動が子供たちのためのものであることを、今一度認識する機会を提示していただいたと、筆者は感じた。

スポーツ現場における暴力問題は、時折ニュースで報道され、そのたびに世間を騒がせている。昨今も、高校野球の暴力問題が報道されたのが記憶に新しい。こうした報道を見るたび、筆者は、「こうした指導現場での暴力問題は、いつまでもなくならないのかな。」と、どこか諦めにも似た感情で、こうした問題を捉えている節があった。レクチャーを聞いた今、問題解決の主体者としての向き合い方を考えてみるのが大切ではないかと感じた。自身や相手のおかれている環境、立場、人間関係などの制約により、実際にできることは何もないのかもしれない。それでも、自分が当事者だったときにできることについて、一度思いを巡らせてみてはどうかという投げかけが、筆者が渋谷先生から受け取ったメッセージであった。

著者略歴：東京都立大学大学院博士後期課程を2023年に修了、同大学院の特任助教として従事（2023-2024）。鹿屋体育大学に日本学術振興会特別研究員として2024年から赴任、現在に至る。研究テーマは、時空間的不確実性のある移動対象の推定、および捕捉運動の制御方略との関係性。



本セッションでは、対人状況における運動技能の熟練差、大学生の運動能力観の実態、そして心理的安全性とバーンアウトの縦断的相互関係という、スポーツ心理学の多様な領域を横断する3つの研究が報告された。テーマこそ異なるが、いずれの研究も「人は環境の中でどのように行動を選択し、自身の能力や心理を形成し、変容させていくのか」という根源的な問いに触れており、スポーツ場面における人間理解の複雑さと奥行きを改めて感じさせる内容であった。

まず、高野・奥村による柔道競技の攻撃切替技能に関する研究は、スポーツ特有の対人相互作用を扱ったものであり、選手が相手の動きに応じて瞬時に行動を調整・切り替えるプロセスを実験的に抽出しようとした点に大きな特徴があった。特に、相手が反応するかどうかが不確定な状況を設定した「切替課題」は、実戦場面における不確実性の再現を試みたものであり、単純課題では捉えにくい知覚-運動プロセスを可視化する工夫が見られた。熟練者ほど状況の変化を早く察知し、動作の切替や精度を維持できるのではないかという仮説は、実際の競技現場で観察される熟練性の本質に迫るものであり、研究的にも実践的にも価値が高いと感じられた。質疑応答では、実験者の防御動作の一貫性や、参加者と実験者の構えが動作戦略に影響を与える可能性など、運動計測研究に特有の統制の難しさが議論となった。また、今後の研究においては、柔道着を掴む瞬間（コンタクト）をどのように識別するかといった実験手法上の課題についても検討された。さらに、切替判断が生じるタイミングの個人差や、視覚情報のどの要素を手がかりとしているのかといった知覚的要因にも関心が広がる研究であった。全体として、対人技能を定量的に捉えることの難しさと同時に、その挑戦の魅力が感じられる発表であった。

次に、古田らの研究では、大学生の運動能力観を「固定的か／増大的か」という二次元で捉え、広域的分野（言語、数学、音楽、運動・スポーツ）と狭域的分野（体育の7領域）の両側面から詳細に検討していた。特に、運動・スポーツ領域では約6割、音楽では約7割が固定的能力観を示し、他の分野に比べて「才能は先天的に決まる」と考える者が多いことが明らかになった点は、体育・スポーツ教育に携わる者にとって非常に興味深い結果であった。一方、言語では約8割が増大的能力観を示し、努力や経験によって能力が伸ばせるという認識が強く、同じ大学生でも分野ごとに能力観が大きく異なることが示されていた。狭域分野では、陸上やダンスで固定的能力観が強く、器械運動や水泳では増大的能力観が優勢であった。これらの差異には、それぞれの活動に対する成功体験や学習機会、評価基準の違いが影響している可能性があり、運動学習や教育心理の観点からも考察の余地が大きい。質疑では、能力観が形成されるプロセス、特に体育授業を通じた能力観の変容可能性に関心が寄せられた。本研究は、運動が苦手な学生への支

援や教材開発にも応用可能であり、今後の教育実践への波及効果が期待される。

最後に、甲谷・佐藤・白坂による、心理的安全性とバーンアウトの縦断的関係を扱った研究では、先行研究でしばしば前提とされてきた「心理的安全性が高いほどバーンアウトが低下する」という一方向的な見方を再検討し、両者が相互に影響し合う可能性を示した点が極めて重要であった。Time1のバーンアウトがTime2の心理的安全性に影響し、さらにTime2の心理的安全性がTime3のバーンアウトに影響を及ぼすという交差遅延パネルモデルの結果は、アスリートの心理状態が静的なものではなく、時間をかけて相互作用的に推移することを示しており、アスリートの心理的メカニズムを理解する上で大きな示唆を与えるものであった。質疑では、他社の存在が心理的安全性の形成にどのように影響するのか、さらには競技レベルや練習環境の違いがバーンアウトの経路にどのように作用するのかといった、より複合的な要因が議論された。また、シーズン中の心理的変動や外的ストレスの扱いを含め、今後の縦断デザインの高度化に向けた方向性も示され、この研究が持つ発展性の大きさが改めて確認された。

以上のように、本セッションの3つの研究は、運動技能・能力観・バーンアウトという一見異なる領域を扱いながらも、人間の認知・情動・行動の仕組みを探るという共通の関心によって強く結びついていた。また、質疑応答は比較的活発で、研究方法の改善点や現場での応用可能性について多方面から意見が交わされ、学びの多い時間となった。スポーツ心理学研究が扱うテーマの広がりや深さを改めて実感できる、意義深いセッションであったと総括できる。

著者略歴：長谷川弓子（岩手大学・人文社会科学部）
運動学習・運動制御を専門とし、ゴルフのパッティング課題を中心に、「人はどのように狙いを定め、動きを生み出すのか」という“狙う心理”の解明を目指して研究に取り組んでいる。モーションキャプチャによる動作分析を用いて、知覚と動きが結びついていくプロセスや、スポーツ技能が形成される仕組みの探究を進めている。

学会大会の最終日となる 8 月 29 日(金)に専門領域別研究発表の体育心理学／口頭発表 2 が開催され、3 演題の発表が行われました。同じ会場では、午後から体育心理学領域のキーノートレクチャーや口頭発表 1 が実施されていたこともあり、来場者も多かったと記憶しております。

演題 1 は「チアリーディングにおけるスタンツを原因とした腰痛の心理社会的状況についての質的検討」というテーマで、松岡彩芽先生（法政大学大学院）が発表されました。本発表では、チアリーディングにおける人を持ち上げる動作である「スタンツ」を主に行うベースの選手の腰部障害に着目し、その心理社会的状況について半構造化面接によって検討されました。この発話データは GTA（グラウンデッド・セオリーアプローチ：Grounded Theory Approach）をもとに分析されました。GTA を用いた分析の結果、「チーム環境」や「周りからのサポート」、「腰痛を伝える」等の 9 つのカテゴリーが生成され、チアリーディングにおけるベースの選手は、チーム全体への練習が滞る等の悪影響や、指導者等の周囲の選手自らに対する評価の低下から、腰部障害が発生しても休養を確保できない環境であることが報告されました。また、その課題にはチアリーディングにおける特有のチーム文化が存在していることも考察されました。本発表に対し、フロアから腰部障害のみに着目した理由やチーム文化の見直しに対する具体的方策等の質問がなされ、選手を取り巻く環境面の改善を図ることの必要性が示唆されました。以上の知見から、チアリーディング選手に対して、休養を確保しにくい状況や痛みを抱えながら競技を継続せざるを得ない文化の存在が課題として浮き彫りとなりました。今後は、チーム内の積極的な情報共有を通じてチーム文化を見直し、選手が安心して競技に取り組める環境を整備していく必要性を感じました。

演題 2 では「キリスト教を信仰するアスリートが競技生活を続けていくためのプロセス」というテーマで、山本築先生（日本体育大学大学院）が発表されました。本発表は、世界中で文化や社会に根付いてきた宗教、特に日本文化に影響を及ぼすキリスト教に焦点を当て、そのクリスチャンアスリートにおける宗教的信念が競技生活にどのような影響を及ぼすかについて質的に検討されました。また、同アスリートの特徴として、競技生活を継続する上で抱えている特有の宗教的な課題に対して、周囲からの理解が得られることが必要であることも踏まえ、半構造化インタビューが実施され、修正版 GTA を用いて分析されました。インタビューによる発話データを分析した結果、クリスチャンアスリートは競技生活を継続している中で「世間一般の価値観とキリスト教の教えとの間に『価値観がなじまない』という経験をしている」ことが報告され、同アスリートが葛藤を抱えながら競技生活を送っていることが報告されました。

一方で、継続的な競技生活において宗教的慣習の実践を

通じて、自らの競技に対する目的意識の明確化が図られ、「神のためのスポーツ」という意識は形成されていくことも報告されました。本発表に対して、フロアからキリスト教だけではなく他の宗教にも同様の傾向がみられるか、キリスト教への信仰心の程度によって、その意識や行動に差異がみられるのではないか等の質問がなされ、同アスリートの宗教的慣習に対する周囲の理解が必要であると感じ、今後は同様の宗教的背景を持つアスリートを理解・支援できる環境づくりをどのように行っていくのかということに興味深く拝聴しました。

最後の演題は『『奚般氏著心理学』と『倍因氏心理新説』の体育心理学からみた史的研究』というテーマで、楠本恭久先生（日本体育大学）が発表されました。本発表では、わが国で最初に出版された「奚般氏著心理学」に対して、



「倍因氏心理新説」の史的研究を実施する上で先行研究が限られていることが報告されました。また、発表者は「倍因氏心理新説」を古書店で発掘され、本発表において目次と翻訳された文章の一部が報告されました。その文章では、発表者の研究活動の主であった「呼吸」というキーワードに焦点を当てた内容が説明されました。以上の発表を踏まえ、若手研究者に対し「現在の運動・スポーツ活動における心理的事象に焦点を当て、研究内容や活動を展開するだけではなく、古書などにも目を向ける」ことも研究活動を充実させるために重要であるとのメッセージが本発表者より送られました。本発表に対して、フロアから「倍因氏心理新説」や発表者の研究活動に関する質問が出され、本専門領域以外の専門領域の先生方も加わり、それぞれ活発な議論が展開されました。以上より、本発表から現代の研究活動においても古書や史的資料に目を向けることの重要性が提起され、若手研究者に対する示唆に富む内容でした。

最後に、貴重な研究成果を発表いただきました先生方や、質問いただきましたフロアの先生方、大会運営にご尽力いただきました全ての皆さまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

著者略歴：九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻博士課程単位取得満期退学後、博士（教育学）を取得。現在は関西福祉大学教育学部保健教育学科教授。中学校体育におけるフィードバックの認知、アスリートのライフスキル獲得に及ぼす要因、意義について研究している。



私は 2025 年 8 月 27 日から 29 日に日本体育大学・深沢キャンパスで開催された日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会に参加し、「アスリートにおける熱望・警戒イメージ尺度の作成」という演題でポスター発表をさせていただきました。今回、ポスター発表の演者報告の機会を賜りましたので、発表内容および質疑応答の内容について報告させていただきます。

卓越したパフォーマンスが求められる競技スポーツにおいて、アスリートは目標を達成するためにイメージトレーニングを利用しています。イメージトレーニングの設計においては、アスリートの個人特性を考慮する必要があります（Cumming & Williams, 2013）。

Higgins (1997) は、目標追求のプロセスにおける個人差を説明する理論として制御焦点理論を提唱し、目標追求のプロセスには促進焦点と防止焦点という 2 つの自己制御システム（制御焦点）があることを示しています。促進焦点は成果や希望、願望に関係し、肯定的な結果の有無によって規制され、防止焦点は安全性や責任、義務に関係し、否定的な結果の有無によって規制されます。さらに、Higgins (2000) は制御焦点理論を発展させた制御適合理論によって、人は自分の制御焦点に適合した目標追求手段を用いるときに制御適合を経験し、自分の活動に対する価値を高めることを提案しました。そして、これまでに促進焦点には熱望方略（獲得を最大限にする）が適合し、防止焦点には警戒方略（損失を最小限にする）が適合することが明らかにされています。

私は、アスリートの個人特性に着目したイメージトレーニングの設計のために、制御適合理論を応用できると考えています。アスリートが利用するイメージは理想的なパフォーマンスを想起して獲得を最大化しようとする熱望方略の側面と、失敗を想定して損失を最小化しようとする警戒方略の側面を併せ持つため、アスリートの制御焦点に適合するイメージを明らかにすることで、パフォーマンス向上に寄与するイメージトレーニングの提案につながるのではないかと考えています。そこで、本研究ではアスリートの熱望・警戒イメージ尺度を作成しました。本研究では望ましい最終状態に近づき、リスクがあっても積極的に獲得を求めるイメージを「熱望イメージ」、望ましい最終状態への不一致を避け、リスクを回避して慎重に損失を防ぐイメージを「警戒イメージ」と定義しました。

対象者は、関東圏および関西圏の大学生のうち、大学の運動部または大学以外のクラブに所属し、競技力向上を目的としてスポーツを行っている大学生アスリート 347 名（男性 198 名、女性 147 名、無回答 2 名、平均年齢 19.8 ± 1.0 歳）で、調査は Web アンケートを用いて実施しました。本研究では、先行研究（Hall et al., 1998; Martin et al., 1999; Ouschan et al., 2007）を参考にして作成した 30 項目とアスリートからの自由記述から作成した 28 項目によって熱望・警戒イメージの原案を作成しました。

項目分析および探索的因子分析の結果、2 因子 31 項目の解が示されました。本研究では、今後の尺度の利便性も考

慮し、因子の項目の中から、イメージの機能（Hall et al., 1998; Martin et al., 1999）ごとに最も因子負荷量の高い項目を選定しました。選定した 10 項目に対して、再度探索的因子分析を行い、最終的な因子パターンを確認しました（表 1）。第 1 因子は熱望イメージ、第 2 因子は警戒イメージの項目で構成されていました。得られた 2 因子 10 項目の解に対して確認的因子分析を行い、モデルの適合度は許容範囲であることが示されました（ $\chi^2 = 84.57$, GFI = .95, AGFI = .92, CFI = .96, TLI = .95, RMSEA = .07）。本研究により、イメージの 5 つの機能を反映した熱望・警戒イメージ尺度が作成され、構成概念妥当性のうち、内容的な側面と構造的な側面、一般化可能性の側面で証拠が確認されました。

今後は尺度のさらなる構成概念妥当性を確認する必要があります。また、アスリートの制御焦点と熱望・警戒イメージの制御適合を実験的・実践的に検討し、アスリートの個人特性に適合するイメージトレーニングを提案できるように研究を進めていきたいと考えています。

本研究の発表時には、今後心理尺度の作成を考えている先生や質的研究におけるデータ分析について検討している先生から、「アスリートの自由記述からどのように項目（カテゴリー）を作成したのか」という質問があり、詳細に作成方法を説明し、その内容について議論しました。また、アスリートの指導をしている先生からは、競技場面で熱望イメージと警戒イメージを使い分ける重要性について議論させていただき、今後の研究を進めていく上で貴重な助言を得ることができました。母校である日本体育大学で研究を発表でき、多くの先生とお話しさせていただく中で、より一層研究と実践の研鑽に励んでいきたいと感じました。

最後に、本大会を開催してくださった日本体育大学をはじめとする大会組織委員会の皆様へ、この場をお借りして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

項目	機能	因子		M (SD)
		I	II	
熱望イメージ($\alpha=.85, \omega=.85$)				
積極的に挑戦するイメージ	熱望MG-A	.79		5.50 (1.29)
難しい状況でも積極的にプレーするイメージ	熱望MG-M	.77		5.33 (1.32)
リスクがあっても積極的にスキルを遂行するイメージ	熱望CS	.77		4.99 (1.42)
リスクがある中で目標を達成するイメージ	熱望MS	.70		5.14 (1.35)
成功を目指した戦略を遂行するイメージ	熱望CG	.62		5.62 (1.22)
警戒イメージ($\alpha=.80, \omega=.80$)				
失敗しないように安全なプレーをするイメージ	警戒CS	.84		4.88 (1.48)
失敗を考えて用心深くなるイメージ	警戒MG-A	.70		4.46 (1.75)
安全な試合を展開していくイメージ	警戒CG	.64		4.99 (1.42)
難しい状況で安全にプレーするイメージ	警戒MG-M	.63		4.85 (1.38)
リスクを避けて目標を達成するイメージ	警戒MS	.56		4.61 (1.53)

※ 太字はアスリートの自由記述から得られた項目

表 1 熱望・警戒イメージ尺度の探索的因子分析の結果

著者略歴：日本体育大学体育科学研究科博士後期課程修了。体育科学(博士)。現在は関西学院大学人間福祉学部人間科学科に勤務し、アスリートのイメージに関する基礎的・実践的研究に取り組む。日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士として、アスリートへの心理サポート活動にも従事している。



運動学習の“非一様地形”とその安定・発展を読み解く：
筆跡図形の部分構造と軌道エントロピーの関係

村上宏樹（金城大学）

本研究発表は、中京大学・山田憲政先生との共同研究の一環として実施したものであり、これまでに公表した論文「Quantifying motor learning through entropy analysis of the mirror-drawing task」(Murakami & Yamada, Entropy, 2025) の成果をさらに発展させたものである。今回の学会大会では「運動学習の“非一様地形”とその安定・発展を読み解く：筆跡図形の部分構造と軌道エントロピーの関係」と題してポスター発表を行った。

従来の鏡映描写課題研究では、標準的に 30° の角度条件が用いられてきた。しかし、この1条件のみでは、運動制御に関わる多様な要因を十分に検討することは難しい。例えば、小さな角度であれば進行方向の判別が曖昧になり、微小な補正運動が連鎖的に生じる可能性がある。一方で大きな角度は方向手掛かりが明瞭であるものの、急激な方向転換が求められるため、減速や再加速といった力学的負荷が大きくなる。学習過程を“非一様地形”として捉えるならば、課題の角度構成を多様化することによって初めて、学習者がどのような地形でつまずき、どのように安定化に至るのか、そのプロセスを抽出できる。本研究はこの視点に基づき、 $15^\circ \cdot 45^\circ \cdot 60^\circ$ という複数条件を設定し、従来の成果を拡張する試みである。

分析においては、筆者らがこれまでの研究で提案してきたエントロピー解析手法を用いた。具体的には、描かれた軌跡の各座標点を図形中央線からの距離に変換し、その分布の確率特性に基づいて情報量を算出するものである。従来の研究では、図形を描写する総運動時間 (MT) や総逸脱回数といった単純な指標が主に用いられてきたが、これらの指標では、「どの部分で難しさが生じているか」を十分に明らかにできない課題があった。本研究では、図形をセグメントごとに分割し、それぞれの部分について MT とエントロピーを算出した。これにより、運動の安定性と複雑性を局所的に評価し、特定の構造的要因（角度の大きさ、反転動作の有無、回頭負荷など）が制御困難性をもたらすメカニズムをより精緻に捉えることが可能となった。

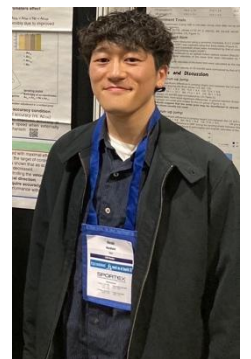
結果として、小角度 (15°) 条件では方向判別の曖昧さにより逸脱が頻発し、エントロピーが突出して高まること示された。これは、従来の 30° 条件よりもさらに不安定な状況を生むことを意味する。一方で、大角度 (60°) 条件では軌道はまとまりやすいが、方向転換に伴う減速と再加速が必要となるため、MT が延長する傾向が確認された。また、反転辺と非反転辺の比較では、反転辺において速度符号の切り替えと方向転換が同時に要求されるため、制御負荷が高く運動時間が長くなることが明らかになった。こうした知見は、運動学習における「難所」が一様ではなく、知覚判断の不明瞭さ・力学的負担・制御切り替えの複雑さといった複数の要因が交錯して形成されることを示している。本学会大会には、これらの実験設計や実験結果および考察を報告することで、今後の論文執筆に向けての他研究者からの多様な視点を獲得するために参加した。

発表当日は、こうした古典的心理学実験課題を現代的に

再解釈した点に多くの関心が寄せられた。特に、エントロピーを用いた分析手法の独自性については質問や議論が集中し、理論的背景から実験設定の細部に至るまで活発に意見交換を行うことができた。質疑では、こうした確立された心理学実験課題を現代の理論枠組みにどのように位置づけるか、またエントロピー指標が従来の誤反応数や平均時間の代替となり得るのかといった点について議論が展開された。これにより、分析手法の汎用性や他の運動課題への応用可能性を考えるきっかけとなり、研究の広がりを意識させられた。こうした交流を通じて、今後さらに解明すべき課題が整理され、自らの研究方向性の妥当性を改めて確認することができた。また、個人的には、議論してくれた皆さまの古典的な心理学課題に対する関心の高さは意外であり、現代の研究潮流においてもその理論的意義が再評価されつつあることを実感した。新たな技術が次々と登場する今日においても、古典的手法を理論的に深掘りし、運動学習の本質を探る試みは重要であると強く認識した次第である。

著者略歴：1994 年鳥取県生まれ。2022 年中京大学スポーツ科学研究科博士後期課程修了、博士（スポーツ科学）。2024 年より現職。

スポーツ現場に見られる「失敗できない状況」や「対人場面の不確実性」を抽象化し、制御戦略や情報処理の特性を検討する実験系の構築に取り組んできた。近年は、PsychoPy などの現代的な実験プラットフォームを活用し、Fitts 課題や鏡映描写課題といった古典的心理学実験を再解釈することで、運動学習や制御の本質的メカニズムを定量的に捉える研究を展開している。理論と実践を往還させながら、人間の運動制御の柔軟性を解明することを目指している。



スポーツ文化研究部会のメンバーとして活動し始めてから2年が経ちました。今大会終了時点から、2期目が始まります。部会のメンバーは、約半分が入れ替わりとなり、心新たに取り組んでいきたいと思っています。今大会では、課題Aのシンポジウムのコーディネーターを務めました。課題Bのシンポジウムには、オーディエンスとして参加しました。この会報では、部会の活動とシンポジウムの内容についてご報告いたします。

部会の活動は、主にリモート会議やメールを通じて行っています。課題AとBに分かれて活動していますが、部会長を通じて情報の共有がなされています。この部会は、若手からベテランの先生までいらっしゃいます。また、部会の先生方は、所属する専門領域が異なるので、この活動自体がこれまでにない交流の場にもなっています。

さて、課題Aのシンポジウムでは、『「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考える』というテーマを設定しました。シンポジストは、平和構築が喫緊の課題となっている現場に深くかかわってきた3名の先生方でした。昨年度に引き続き、このシンポジウムでは、紛争や国際協力、平和とスポーツの関係性について先生方のご経験や現在の課題についてお話いただきました。今回、先生方が取り上げた話題の中には、政治的影響や個人では解決できない問題が多々ありました。その問題に我々がどのように向き合っていくかを考える機会になったと思います。シンポジストの一人である井本さんは、紛争地域におけるスポーツの役割・目的として、「心のケア」が含まれていることをお話してくださいました。このお話を伺い、私はハッとしました。その理由は、体育心理学専門領域に所属していながらも、この「心のケア」ということについて、無知であったからです。そして、この「心のケア」としてのスポーツの存在意義やスポーツの可能性ということについて、我々はもっと追求してもよいのではないかと感じました。各国の平和構築プロセスにスポーツと「心のケア」がどのようなかわりを持てばよいのかを検証していくことが、我々体育心理学専門領域の研究者に求められているような気がした2時間でした。

そして、課題Bでは、「青少年のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー」というテーマを設定しました。シンポジストと指定討論者は、バックグラウンドが異なる専門家・実業家の先生方4名でした。このテーマは、運動部活動の地域移行／地域展開という時期を迎えている現代において、非常に重要なものでありました。会場は満席であり、多くの方が関心を持たれる様子がうかがえました。青年期がスポーツをする環境や機会をどのように形成していくべきかを指定討論者やオーディエンスの皆さんも含めて議論を進めることができました。この議論では、部活動や地域のスポーツクラブ等の文化は、だれが・いつ・どのようにして作り上げてきたのか、皆さんと一緒に考え、今後はどのようにあるべきかを検討することができました。また、我々は青年期のスポーツ活動にどのようにかわり、どのようにサポ



ートすることが求められているのかを考え直す機会にもなっていたように思います。青年期のスポーツ活動の在り方に関する課題・問題は、どの時代においても我々が向き合っていくものであると思います。この青年期のスポーツ文化について多角的にそして俯瞰的に検討し続けていくことが、日本のスポーツの発展につながるのではないのでしょうか。

今回のシンポジウムにご参加いただきました先生方には、心より御礼申し上げます。実際に運営に関わっていると、スポーツ文化というものに体育心理学やスポーツ心理学がアプローチできる可能性がたくさんあることに気づかされます。今後の研究の発展にもつながる可能性がありますので、ぜひとも次回大会では、スポーツ文化研究部会での口頭発表やシンポジウムにご参加ください。

最後になりますが、このような運営の機会を与えてくださった杉山先生（会長）はじめ、体育心理学専門領域の先生方に感謝申し上げます。この活動は、研究のフィールドや人脈を広げる機会につながると 생각합니다。今大会では、シンポジウムのコーディネーターという役をいただきましたが、当日までとても不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、部会の先生方に助けていただきながら、何とかまとめとしてのお話を皆様にお伝えすることができました。今後は、部会の先生方とともに、次回大会の準備を進めたいと思います。引き続き、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

著者略歴：順天堂大学大学院博士後期課程・スポーツ健康科学研究科修了、博士（スポーツ健康科学）。現在は、コンピュータ理工学を専門とする会津大学の上級准教授として精神保健学や実技等の授業を担当している。専門種目は、アルペンスキー競技。国民スポーツ大会冬季大会では、福島県アルペンチームのコーチ・監督として参加している。福島県スキー連盟の役職は、総務本部長。長年の競技経験から、ウィンタースポーツにおけるスポーツ傷害のリスクマネジメントを研究の軸とし、現場に役立つガイドライン・安全マニュアルの作成に取り組んでいる。



第1期の3年間につづき第2期を終えることになった。部会立ち上げの会議に参加して以来だと何年になるかわからないぐらいだがそれなりに努力できたと思う。本年度はシンポジウムに表立って関わることは控えた。それで一般口頭発表座長の前に課題Aのシンポジウムを聴講した。

佐野信子氏（立教大学）は男女共習の重要性を説いておられた。特に男女で括れない性にも「平等」が保障されるべきだとのことだったかと思う。でも、それが体育の本来の目的にどう資するのかは分からなかった。

綿引清勝氏（東海大学）の講演では、発達障害から肢体不自由までを含む多様な子どもを包括（インクルード）する体育が紹介された。誰もが参加し楽しむことができるようにルールや用具をadaptさせる；その体制をまとめたインクルージョン・スペクトラム・モデル（筆者略、ISM）が紹介され、これを高校授業に取り入れた実例が示された。そこでは車椅子の生徒さんが健常な生徒さんに車椅子の操作を教えていた。車椅子の生徒が周囲に活発に教える。それはお互いが「次に」つなげていく授業であり、共に学び・育つ態度を涵養する一つの形である。学びのアクセシビリティを「公平」にする上で、マイノリティを「受け入れる」態度だけではなく、その差から互いが「学ぶ」ことの大事さがよくわかった。

最後に井谷恵子氏（京都教育大学）の講演があった。多様性を政治の道具として扱うのではなく、各マイノリティの視点から考えることが重要である。体育は男性優位の世界で、序列と競争の価値に支配され・規範性を強制する世界なのだという。そして体育嫌いにとって競争・技能中心の体育という教科は脅威である。氏はその構造的問題が指導要領とカリキュラムの実態に内在していると指摘した。現行のカリキュラムには強固な性別二元制がある。これらが学校に規範として残り、（生徒を含む）人々の中に内面化される。またあまりに競技に偏った視点は、本来のスポーツ；つまり自然との対話、遊び、自由なルールが持つ価値を狭小化する。縄跳びや駅伝、パルクールなども全てが競争化されていく。この「本来の」スポーツ排除の構造を解体するには、実践者が多様なスポーツを平等に扱い、選択の自由を保障する態度が必要だという。

指定討論者の横山剛士氏（金沢大学）の質問のあと、フロアから出た「多様性を強調すべき一方で、体育の普遍的内容とその評価とは何か？」という質問があった。下線の井谷氏の問いは、実は筆者が所属する集まりでも幾度となく俎上に登った。これもまた体育の普遍性のかたちなのだと思う。綿引氏が示した学びもしかり、多様性というキーワードを「学術的に」用いることで、初めて体育の普遍性が見えてくる。それは数多の領域が寄せ集まったこの学会が示さねばならない体育の価値だと思う。演者とフロアの議論がそういった価値を創出する好い事例だと思った。

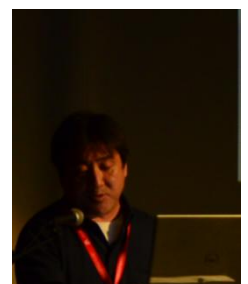
午後から課題Bのシンポジウムが始まった。山田孝禎氏（金沢大学）から、自分のパフォーマンスを含め数多の情

報を可視化するICT整備の成果が示された。時空間的に離れた他者と情報を共有し、主体的な学びにつながれたらよい。一例として側方倒立回転の授業にこの環境を導入した例が示された。しかし統制群との間には眼に見えるような学習効率の差はなかった。企業も参入し、これからも情報はたくさん得られるようになる。でも情報が多く得られればそれだけ上手くなるわけではない；それは古典的な運動学習研究からも明らかだ。その一方で、人（監督・コーチ）との関わりがやる気を促進する。こうした動機づけも含めた学習効果を確認していくことがICTの価値を語るポイントなのだろう。

清水和宏氏（日本スポーツ振興センターハイパフォーマンスセンター）から、心身調整技能の育成可能性について話題提供がなされた。トップアスリートは特定の目的に向けて望ましい状態に心身を整える。ここで、幅広い視点と多様な情報が必要になる。氏の業務は、免疫機能を中心とした競技者の心身調整である。大事なものは免疫機能そのものだけではなく、実際の免疫活動と主観とを照合する能力だという。ここがうまくいくと自分の興味で計測・確認作業が進み、調整技能が大きく進展する。その過程でも情報機器が用いられるが、最終的には「主観」が最も大きな拠り所となる。こうした知見をライフパフォーマンスに適用できることを周知すべく、女子中学生による初潮への適応を目的とした取り組みがなされた。そこでも客観的な知識と主観とのバランスが重要との説明があった。

最後に高橋幸二氏（長崎大学）から、2期分の成果をまとめる身体性の考え方が論じられた。身体は多義的に意味づけられる。その中で「保健」体育が捉えるべき身体の意味とは何か？当然、精神とは不可分であり、社会性とも切り離せない。具体的な行為主体がその可能性を探索する存在である。そこには出力だけではなく入力系の機能が必要で、その総体を身体と考えるべきである。フィジカルリテラシーの概念は清水氏が論じた心身調整の機能に近似していて、ゆえに一連の取り組みの理論背景となりうるように思えた。フロアから質問して得た回答から、教員・指導者自身が自分の身体と向き合っていることが自律性の育成に極めて重要であること、そうして日々向き合っている立場から世の中に散在する情報を収集・要約して学習者に指導すべきであることを学んだ。加えて、そうした「間-身体性」の研究が、今後、文理を貫いて推進されるべきだと思った。今後部会の発展を期待しつつ、今後はこの場でできた仲間と一般発表の演者として参加したい。

著者略歴：筑波大学大学院修了。博士（体育科学）。山梨大学教育学部教授。様々な個性が創発する集団秩序の形成過程に興味がある。写真はTeam& Multi-agent Dynamics @Montpellierにて。



競技スポーツ研究部会では、「競技力の向上、コーチング力の向上、アスリートを取り巻く環境とシステムの改善の観点から、全ての人々を対象とした競技スポーツの発展に貢献し、ひいては関連する社会問題の解決に寄与する」というミッションがあり、このミッションに基づいて「競技スポーツをどのように豊かにするか」という解決すべき上位課題を設けていました。そして、今年度、上位課題解決に向けて「スポーツ指導者の幸せとはー成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー」をテーマにシンポジウムを実施いたしました。

スポーツと聞くと、その主役はアスリートが真っ先に思い浮かび、上位課題を解決するためには、アスリートの人生の豊かさが重要であることは間違いないことではあると思います。しかし、アスリートだけで良いのか？という問いが、競技スポーツ研究部会の会議の中で生じました。アスリートを支える側の人生もまた豊かであることが大切なのでは？という議論がなされた結果、今年度のシンポジウムでは、指導者にスポットライトを当ててみよう！となった経緯がありました。

ここから登壇者の検討に入り、まずは現場で指揮を取る指導者の方にご登壇いただくことが決まりました。そして指導者をサポートする役割も果たすスポーツメンタルトレーニング指導士の立場からは筒井が登壇することになりました。さらに、選手本位の「アスリートセンタード・コーチング」を提唱し、コーチディベロッパーの養成に尽力されている伊藤雅充先生（日本体育大学）にご登壇を依頼しました。どの指導者の方に登壇いただくかは、部会員で検討を重ねたのち、筒井が活動を共にした経験があり、その際にアスリートの幸せを大切にされていた東京 2020 パラリンピック車いすバスケットボール監督の及川晋平氏（一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟）をお招きし、ご登壇いただくことが決定しました。また、コーディネーターは森嶋琢真先生（中京大学）にお務めいただくことになりました。

事前の打ち合わせで、当日の注意点として参加者の皆様も「アスリートの幸せとは何か？」という視点を持ちやすいことを念頭に置いて、本シンポジウムの主役は指導者であること、その指導者の幸せについて考える時間であることを強調していく旨を確認いたしました。

本シンポジウム本番は、冒頭にコーディネーターの森嶋先生から企画の趣旨説明があり、「本日の時間は、指導者の皆様一人ひとりが主役です」という力強いお言葉のものとスタートを切りました。そして一人目の及川氏から「車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき」と題してご講演をいただきました。特に、パラスポーツにおいては、健常者のスポーツとは異なる特有の課題があるが、スポーツ科学の研究成果もオリンピックのアスリートのデータが中心であるため、パラリンピックのアスリートが参考にして良いのか判断が難しいがものがほとんどであるという事実を共有いただき、だからこそ、アスリートと共に考えることで、課題を解決するプロセスに指導者とし

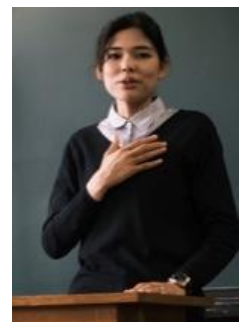
ての幸せを見出すことができる、といったお話がありました。また、パラリンピックでのメダル獲得という目標を設定することは、それを目指すためのプロセスが明確になることから高い機能性があるが、目標を達成した喜びは一瞬のもので、何よりもそれをみんなで目指したプロセスに大きな価値があるといったお話も聞かれました。

二人目に登壇した筒井からは、「心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方」と題して、指導者の抱えるストレスとの付き合い方について、自分自身によるセルフマネジメントと他者の存在によるソーシャルサポートの両側面からのアプローチを示しました。また、ライフキャリアレインボーの考えを紹介し、指導者以外のキャリア以外の役割も重ね合わせて持っている一人の人である事実を指導者もアスリートも自覚する必要性に言及しました。

三人目の登壇者である伊藤先生からは「アスリートセンタード・コーチング」と題してご登壇いただきました。アスリートと指導者がお互いに自己の成長に責任を持ち、持続可能な競技環境を構築するにあたっては、「アスリートファースト」ではなく、「アスリートセンタード」の考え方が重要であるという点をご説明いただきました。また、指導者にとって「自律性の欲求がどのように充足されているか」も重要な視点であり、アスリートのニーズに応えることが指導者自身の意思による選択であれば、自らの価値を実感しうるが、義務感や周囲の期待に応じるだけの行為であれば、自律性はむしろ脅かされる可能性についても言及いただきました。

その後、森嶋先生からパネリストへの質問を皮切りに、パネルディスカッション、フロアからの質問も大変盛況であり、終始活発な議論が行われました。フロアからの質問の全てにはお答えできないほどの質問があったことから、本テーマへの関心の高さを感じることができました。競技スポーツに関わる異なる立場のパネリストが登壇したことで、領域横断研究部会が目指す分野を横断した議論が実現したことも、本シンポジウムの重要な価値の一つと感じられました。ご尽力いただきました全ての皆様にこの場をお借りして改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

著者略歴：大阪教育大学人間科学専攻を経て、奈良女子大学大学院人間文化研究科を修了し、スポーツ心理学研究で博士号（学術）取得。2020年に株式会社 BorderLeSS を起業し、代表取締役を務める。現在はスポーツメンタルトレーニング上級指導士として、ジュニアからプロ、オリンピック、パラリンピック選手を中心に、心理支援およびキャリア支援を行う。



学会から生涯スポーツ研究部会に提案されているミッションである「生涯スポーツ社会の実現に向けた環境と施策をめぐる課題を検討し、その未来展望を描く」の達成に向けて、解決すべき【課題 A】として「ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？」、【課題 B】として「学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？」の課題設定がなされています。私が携わっている【課題 A】ではこのミッションを受けて、昨年度の学会大会（第 74 回大会@福岡大学+オンライン）において、「なぜ、いま「スポーツの価値」を問うのか？—次代に向けたスポーツ：変わる魅力・変わらない魅力—」をテーマとしたシンポジウムが開催されました。そのシンポジウムでは、キックオフ的に今一度「ライフステージに応じたスポーツの価値」を様々な領域の視点から幅広く見つめ直し、今年度以降のシンポジウムに収束的に発展させていくことを目標としました。

このような経緯のなか、今年度のシンポジウムの企画立案に対して、生涯スポーツ研究部会の【課題 A】担当の委員の先生方と計 3 度ほどのオンラインミーティングが行われました。オンラインミーティングにおいては、専門領域が異なる委員同士で企画立案を求められる中、とても協力的、効率的、建設的なミーティングであったことが特に印象に残っています。昨年度のシンポジウムを発展させる形でどのような今年度のシンポジウムのテーマを設定するかがミーティングにおける主題でした。昨年度の総論的なシンポジウムに何らかの方向性を持たせて議論を収束させていくには、次代を担う「子どものスポーツ」をテーマとしたシンポジウムを開催することで、長期目線での将来的な繋がりに貢献できるとのアイデアが生まれました。そして、『「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—』のシンポジウムテーマの設定に至りました。

本シンポジウムは大会 2 日目（8 月 28 日（木））の 10 時 10 分～12 時 10 分までの 2 時間枠で開催され、大教室が満員になるなかで行われました。本シンポジウムのコーディネーターを務められる中野貴博氏（中京大学）による企画意図の説明では、少子化で運動をする子どもの絶対数が減っているなか、純粋に運動をする子どもを増やしたいという強い想いが伝えられました。そのためには競争や強化に重きが置かれる体力や運動の価値の再考を要し、そのためのサジェスションに繋がる 3 名のシンポジストの紹介がなされました。そして、子ども自身の運動に対する好き嫌いだけでなく、子どもの運動を誘発するための「家庭」「学校」「地域」のあり方について考える形で、2 時間のシンポジウムが進捗していきました。

香村恵介氏（名城大学）の話題提供では、『子どもの運動を支える「親子の三問」—家庭と地域の実態とその展望—』のタイトルで、まずは子どもの運動実施や好き嫌いの実態、親の余暇時間や収入などのその背後にある「家庭」の要因についての調査が紹介されました。その改善に向けて、「親子の三問」（空間、時間、仲間）を構築するための

方策として、経済状況に左右されずに子どもの運動の機会を増やすための親の意識啓発、親子ともに体を動かせる時間や場所（自宅でも）を作ること、ママ友やパパ友の繋がりの地域の中間の大切さなどが提案されました。

佐藤善人氏（椙山女学園大学）の話題提供では、『なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか』のタイトルで、子どもにとって不人気の運動の代表格であるランニングを取り上げ、ランニング嫌いを助長する 1 つの要因として「学校」に着目した発表が行われました。佐藤氏自身のランニングの楽しみ方、体育科の学生でも 60%以上はランニング嫌いであるという実態、持久走や長距離走に関する学習指導要領の内容がランニング嫌いを助長する授業運営に繋がること、運動者の自己決定を取り入れることで快感情やランニングの意義の認知が高まることなどの話題が展開されました。

永田厚氏（特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ボラスター）の話題提供では、『スポーツの原点に立ち返る—遊びを通じた地域クラブの取り組み—』のテーマで、スポーツクラブ POLAR STAR の活動方針や活動内容を交えながら、暴力・暴言や勝利主義、過度の練習を脱却した「地域」でのスポーツクラブの取り組みが紹介されました。①ずっと Enjoy（一生楽しむ）、②みんな Play（全員出場）、③誰でも Join（多様性と個性を大切に）の方針の下、活動内に夢中になる遊びを取り入れることで自然と競技力が育まれる潜在学習が生じること、親子対等な意識が育まれることで心理的安全性が高まること、もっとやりたい・勝ちたいという思考の芽生えから他クラブに移籍する子どもや遊びの導入に親の理解を得られないことで退会者もいることなどの問題点も交えての報告がなされました。

3 名のシンポジストの発表後には 30 分の総合討論の時間が残されました。その中では、幼少期の運動の楽しみを周囲がどのようなアプローチをすれば良いか？、働く女性が運動時間を増やすのにはどうすれば良いか？、本シンポジウムと Physical リテラシーとの関連はどのように考えられるか？、家庭環境の影響されずに運動していない子どもがどうすれば運動時間を確保できるようになるか？、父母の疲弊で家庭での対応が難しい場合、それを補うために地域でエネルギーに余力があり、子どもの運動の支援に興味があるのは誰か？、過疎化地域ではどのように本シンポジウムの内容を実現できるか？などの多く質問からの有益な議論が繰り広げられ、盛会で幕を閉じました。

著者略歴：広島大学大学院生物圏科学研究科の身体運動心理学研究室にて博士（学術）を取得。帝塚山大学、福井大学を経て、現在は武庫川女子大学健康・スポーツ科学部に勤務。プレッシャーやイップスに関するスポーツ心理学研究に取り組む。日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング上級指導士。



「健康福祉」部門は、応用研究部会 5 部門の中で唯一、そのタイトルに「体育・運動・スポーツ」の用語を含まない部門である。そうした理由もあり、表面的には体育心理とのつながりが見えにくい部門ともいえる。私は本部門において、第 1 期 3 年ならびに第 2 期 2 年、計 5 年間にわたり、本部会委員を担当した。本稿では、今年度の学会の内容に加えて、5 年間全般の状況についても概観する。

この部門では、「健康の保持増進及び福祉社会の実現につながる身体活動や体育・スポーツに関する科学的エビデンスを蓄積し、それに裏付けられた健康福祉対策の具現化に向けた取り組みを行う」ことをミッションとしている。第 2 期は 2 つの上位課題を設けている。課題名を見てわかるように、2 つの上位課題は、対象者層で分けられており、基本的には同じ内容で構成されている。

【課題 A】：成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか（以下、成熟期の健康福祉）

【課題 B】：子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか（以下、こどもの健康福祉）

シンポジウムは、各対象者層を意識して魅力ある内容が構成されたと考えている。課題 A のテーマは、「フレイル研究最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—」であった。課題 A では、昨年度の課題（フレイル研究最前線：体育・スポーツの貢献）とあえて主題を同じとし、2 年間にわたる展開を見せる構成とした。課題 B のテーマは、「こどもまんなか社会での健康・福祉を考える—誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ—」であった。子どもを誰一人取り残さず健やかな成長に寄与する健康・福祉について、JDEI（Justice, Diversity, Equity, Inclusion）の観点から、障害児と性別に焦点を当てたシンポジウムが企画された。いずれのシンポジウムも、2 時間で 4 名の話題提供がなされた。参加者数は、課題 A が約 100 名、課題 B が約 170 名であった。残念ながら、本年度は昨年度と同様、体育心理学領域の登壇者はゼロであった。

一般発表者数は、課題 A が 4 年代、課題 B が 5 演題であった。これは、昨年度の発表者数と比べると（課題 A が 7 演題、課題 B が 15 演題）、かなり少ない発表数であった。また、体育心理学関係からの発表は課題 A の 1 演題のみであった。

本年度は第 2 期が終了し、新たに第 3 期が始まるということで、引継ぎ会議が実施された（大会第 1 日、12-13 時）。会議では、以下の議題について話し合われた。

1. 応用（領域横断）研究部会の活動について
2. 2025-2026 期 部会長の選定について
3. 2025-2026 期 上位課題の設定について

最後に、私なりにこの 5 年間で感じたことを総括する。今年度の 5 つのテーマ別研究発表の研究発表数を比較する

と、健康福祉の 9 は、他のテーマと比べてかなり少ない（スポーツ文化：18、学校保健体育：43、競技スポーツ：29、生涯スポーツの 21）。これまでも健康福祉における発表数は他のテーマと比べて少なかったが、今年度の少なさは突出した傾向にある。このテーマの学会ニーズなどを見直す時期にあると感じている。こうした状況も相まって、過去 5 年間、体育心理部門からの発表数は、多くても 1-2 演題と少なかった。体育心理学専門領域でのポスター発表数が他の専門領域よりも多いこともあり、テーマ別の発表を選択する傾向自体が少ないのかもしれない。幸い、シンポジウムへの参加者数自体は比較的多い傾向にあり、体育心理分野との親和性が感じられる。いったんはこの動向を維持しつつ、さらに体育心理部門の会員にとって魅力的な内容にするにはどうしたらよいかを模索していく必要がある。

第 3 期より、尼崎光洋氏（愛知大学）が部会員として就任する。新たなリーダーシップのもと、本部門、ならびに本学会がさらなる飛躍を遂げることを願っている。

著者略歴：東北大学文学研究科修了、博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、ウォータールー大学（カナダ）客員研究員などを経て、2015 年より現職。専門は実験心理学。運動制御を支える知覚・認知的な情報処理過程に着目した研究を行っている。主な著書に、「身体運動学：知覚・認知からのメッセージ」



（2008、三輪書店）、「運動支援の心理学：知覚・認知からのメッセージ」（2013、三輪書店）、「姿勢と歩行：協調からひも解く」（2015、三輪書店）、「研究的思考法：思いを伝える技術」（2019、三輪書店）などがある。

2025 年 8 月 27 日から 29 日に日本体育大学で開催された日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会に於いて、スポーツ文化研究部会テーマ別発表【課題 B】「継承されてきたスポーツ文化を問い直す」にて口頭発表いたしました。

「スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化－共起ネットワークによる関与人物の検討－」というタイトルで、スポーツ活動を通じて形成されるといわれるライフスキルの構成要素ごとに、その形成に関与する人物を検討した研究について発表いたしました。ライフスキルとは「日常生活の中で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」（WHO, 1997）と定義され、ウェルビーイングや社会的健康に関連し（Steptoe & Wardle, 2017）、コロナ禍におけるストレス反応緩和効果も報告されています（山田ほか, 2022）。固有のものではなくトレーニング可能な能力であり（島井, 2009）、スポーツはライフスキル教育に適した環境であると報告されており（Gould & Carson, 2008）、スポーツを教育のツールと捉え、スポーツを活用したライフスキル教育は実行可能性が高いといえます。しかし、スポーツ参加そのものではなく、環境、特に指導者やチームメイト、保護者がつくる雰囲気重要な鍵だと指摘されています（Bean & Forneris, 2017; Dorsh et al., 2020）。また、ライフスキルは複合的な概念であり、同時に複数のスキルの形成を促すことは非現実的です（島本, 2018）。つまり、ライフスキル教育プログラムの開発、運用には、ライフスキルのどのスキルに焦点を当てるのか、そしてそのスキルの形成に適した環境であるかを評価するための基礎的知見が必要と考えられます。そこで本研究では、ライフスキル構成要素ごとの関与人物を探索的に検討することを目的としました。

関西のスポーツ系大学の学生アスリートを対象に二時点調査を実施し、180 名（男性 105 名、女性 75 名）から回答を得ました。2020 年 10 月に調査 1 を実施し、「大学生アスリート用ライフスキル評価尺度」（島本ほか, 2013; 以下「ライフスキル尺度」）に回答を求めました。本尺度はストレスマネジメント、目標設定、考える力、感謝する心、コミュニケーション、礼儀・マナー、最善の努力、責任ある行動、謙虚な心、体調管理の 10 因子で構成されています。結果をフィードバックしライフスキル及びライフスキル尺度の各因子の内容について解説を行った後、2020 年 11 月から 2021 年 2 月に調査 2 を実施しました。調査 2 では「○○のスキルが身についた、または向上したと思うエピソード、経験を具体的に述べてください。」という教示文のもと、ライフスキル尺度の因子ごとに、「いつ」、「どこで」、「誰と・誰から」、「どんな出来事、どう感じたか、その後」という回答形式を用い、自由記述で回答を求めました。なお今回は「誰と・誰から」についてのみの発表でした。計量テキスト分析のひとつである共起ネットワーク分析を用いました。この分析は出現パターンが似通った語、つまり共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを作成する手法（樋口, 2014）です。本研究では出現回数が 20 回以上、関連の強さを示す Jaccard 係数が 0.1 以上の語を分析対象と

しました。

分析の結果、目標設定、最善の努力、謙虚な心は「指導者」、礼儀・マナーは「指導者」及び「先輩」、ストレスマネジメントは「同期」及び「友達」、コミュニケーションは「チーム」及び「チームメイト」、体調管理は「自分」及び「チームメイト」、感謝する心は「親」が共起の程度が強い語として抽出されました。なお、考える力と責任ある行動については抽出されませんでした。

本研究の結果から、ライフスキルの構成要素ごとにスキル形成に関与する人物が異なることが示唆され、目標設定、最善の努力、謙虚な心といった個人内スキルは指導者による指導が、コミュニケーションのような対人スキルはピア学習や集団学習が効果的である可能性が示されました。この結果から、効果的なプログラムには目的とするスキルに応じた設計が必要であると考えられます。

応用（領域横断）研究部会は「専門領域を横断する実践的な研究活動の推進を図るために体育学会（当時）の新たな研究組織」（日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会ホームページ）として設置され、第 71 回大会から実施されているテーマ別研究発表はシンポジウムと併せて学会大会の中心に据えられています。アスリート支援や現場への知見還元には、スポーツ科学の他領域との連携が不可欠ですが、日常の研究活動では、意図的に領域を超えた情報収集をしない限り領域内に閉じがちで、他領域の発表に触れる機会は多くありません。応用（領域横断）研究部会のテーマ別発表やシンポジウムは領域を超えた貴重な接点であり、本大会でも、多様な専門分野の参加者が来聴してくださり、直前の発表も全く異なる領域であったことから、越境的な議論が促進されたと感じています。

末筆ながら私事にて恐縮ですが、2024 年 3 月に出産し、同年 10 月より現職に着任して研究活動を再開いたしました。乳児期は宿泊を伴う学会参加が時間的・経済的に困難と考えておりましたが、本学会では 2023 年 12 月の理事会決定により託児利用料が無料化され、おかげさまで前述のような発表の機会を得て、前職の同僚をはじめ多くの皆様と対面で議論することができ、深く感謝申し上げます。今後もこのような環境整備が一層進み、スポーツ科学分野において育児期の研究者、特に母研究者が活躍できる機会が広がることを願っております。

著者略歴：上智大学比較文化学部卒業後、宝酒造株式会社に入社。在職中よりチアリーディングコーチとして活動。その後「脱サラ」をして大学院に進学。大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程修了。博士（スポーツ科学）。日本体育大学体育学部助教、タイガーモブ株式会社プログラムディレクターを経て現職。日本スポーツ協会公認コーチ 3（チアリーディング）、コーチデベロッパー。

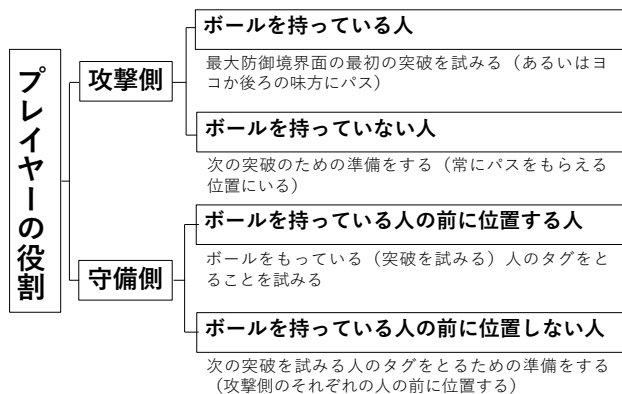


2025年8月27日(水)～29日(金)にかけて、日本体育大学にて開催された日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会の2日目にテーマ別研究発表の学校保健体育研究部会【課題B】において、「タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案」という演題で口頭発表しました。発表内容および質疑応答についてご報告させていただきます。

1. 発表内容

タグラグビーはボールをもって走ったり、後ろの味方にパスをしてボールをつなぐという技術的にはシンプルで運動量が豊富なことから、運動が苦手な子も活躍できるとよく言われています。しかし、地域の大会に参加する小学校チームはどちらかというと減少傾向であり、学校の先生に尋ねると、「ラグビー特有のスローフォワードやオフサイドルールが難しく、どのように教えればよいのかよくわからない」といった意見をよく聞きます。また、研究論文や研究授業を検索すると攻守タイム制や得点エリアを区分するなど簡易化されたゲームが多いようです。タグラグビーはなぜ難しいのか？そのことを検証するために、タグラグビーのゲームができるまでにどのようなスキルを学習しなければならないのか？また、知られている教材だけでこれらのスキルを学習できているのかを検証してみることにしました。

検証の手順として、まず、タグラグビーの動きをモデル化し、プレイヤーの役割を定義付けしました。（下図）



そして、その役割に必要なスキル・学習目標を設定し、授業づくりにおいて、市販の教材などを配置してみました。配置してみると、「ボールを持っている人の前に位置しない人の動き」の学習は、よりゲームに近い状態で少人数のグループで学習したいと考えましたが、そうした教材が見当たらなかったのが新たに少人数のグループで学習できるゲーム型教材「じゃんけん1対1」「じゃんけん2対1」「じゃんけん3対3」のミニゲームを開発することにしました。

この授業づくりの成果を単元の後半で実施した5対5タグラグビーゲームでタグラグビーが難しいとされているスローフォワードやオフサイドの反則の出現率がどうであったかを検証してみることにしました。対象は石川県能美市A小学校4年生34人。2025年5月21日～6月5日まで計8時間。5時間目からの5対5タグラグビーゲームをビ

デオ撮影し、ゲームの動線図を作成して分析しました。

観察ゲーム数13(1試合3分1本)、攻撃ユニット数75、パス回数240、タグ回数135のうち、スローフォワードは1回のみで出現率は0.4%、オフサイドの反則は6回で4.4%でした。この結果から、スローフォワードやオフサイドルールはほぼ理解してプレーしていたと考えられます。

一方で、オーバーステップ（タグをとられてから3歩以内を目安に止まるかパスができなかった反則ルール）が47回で出現率34.8%、ラインタッチも13回で出現率17.3%となっていました。

タグラグビーはフリーパスやタグ後のオフサイドルールによって攻撃のスペースが保証されたゲームであると言えます。オフサイドルールの理解のもと、「タグ後にこそチャンスあり」を考えたいのもっとわかりやすい教材づくりができれば、オフサイドやオーバーステップ、ラインタッチの出現率が下がり、パスやタグ回数をもっとアップする面白いゲーム展開、魅力ある授業づくりが期待できるのではないかと考えています。

2. 質疑応答

ー タグラグビーとサッカーやバスケットボールとの違いは何か？

タグラグビーはフリーパスやオフサイドルールによって、サッカーやバスケットボールのようなボールの争奪がなく、攻撃の学習がしやすい教材であると考えている。

ー 5対5のゲームをするまでの過程は適当か？

ルールを十分に学習しないまま5対5のゲームをするとどうしても運動の得意な子にフォーカスされがちで、本研究では「じゃんけん1対1」から「じゃんけん3対3」を学習する過程で運動が苦手な子は自信をもつための時間、運動が得意な子はサッカーやバスケットボールとは動きが違うことを学習する時間として有効であったと考えている。

ー 「じゃんけん3対3」は結局攻撃中心の学習になっているのではないか？

守備の学習は攻撃があつての学習でしかやりようがなく、いままで「ボールを持っている人の前に位置しない人の動き」を学習する教材がなかったことを考えるとこれがあることで児童の5対5タグラグビーゲームへの転移がスムーズにできたのではないかと考えている。もっとわかりやすい教材はこれからも研究していきたい。

著者略歴：金沢大学大学院人間社会環境研究科（博士前期課程）地域創造学専攻修了。小松市ラグビーフットボール協会理事長、石川県ラグビーフットボール協会副理事長。主に小中学校体育向けのタグラグビー授業の研究を進めています。



スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発
～スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて～

小塩靖崇（東京大学）

2025 年 8 月 27-29 日（東京）に開催された日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会において口頭発表をいたしました。

背景 近年、アスリートのメンタルヘルスの重要性は国内外で広く認識されていますが、教育機会は依然として限られ、とりわけチーム現場で学ぶ仕組みは不十分です。アスリートは一般集団と同等あるいはそれ以上の頻度でメンタルヘルス不調を経験する一方（Gouttebarger V, et al. 2019; Ojio et al., 2020）、「一人で何とかすべき」「専門家にはかかりたくない」といった価値観や文化的背景から、必要な支援を利用しない傾向があります（Ojio et al., 2021）。援助希求行動が抑制される背景には、制限的な男性性規範や心理的安全性の低さといった社会文化的要因があると考えられます（Ojio et al., 2025）。こうした課題に対し、国際オリンピック委員会（IOC）は 2021 年に Mental Health in Elite Athletes Toolkit を公開し、アスリートだけでなく指導者やスタッフを含む包括的教育の必要性を示しました。日本語版は 2022 年に公開され、国内で実装が求められます。本研究では、引退後アスリートが講師となり、チーム単位で実施可能な短時間の教育プログラムを開発・導入し、その効果を検証することを目的としました。

方法

対象とデザイン 国内の競技スポーツチーム 2 チーム（バドミントン・バレーボール、計 34 名、平均年齢 21.4 歳、女性 100%）を対象としました。プログラムはメンタルヘルス研修を受けた引退後アスリート 2 名とメンタルヘルス専門家（筆者）が実施しました。デザインはプレ・ポスト・2 か月後フォローアップの縦断測定とし、評価指標は以下の通りです。

- メンタルヘルスの知識（MHL）：12 項目（0-48 点）
- 心理的安全性（SPSI）：11 項目（0-44 点）
- 援助希求意図：「こころの不調を感じたとき、専門家に相談しますか？」に対する回答
- 精神的健康状態（APSQ）：10 項目（10-50 点、17 点以上をカットオフ）

統計解析は線形混合モデルおよび一般化線形混合モデルを用い、時間効果・群効果・交互作用を検討しました。

プログラム内容 訪問型セッション（60 分+Q&A30 分）で、「試合時のメンタルの整え方」「心の健康とパフォーマンス」「メンタルヘルス不調の実態」「セルフケアと支援活用」を扱いました。教材にはスライド・動画・ワークを用い、Toolkit をベースとした資料を配布しました。狙いは、知識向上と対話を通じた心理的安全性の醸成です。

結果

メンタルヘルスの知識（MHL） 時間効果は有意で（ $\chi^2(2)=29.4, p<.001$ ），全体として得点が上昇しました。効果量は Pre-Post で $dz=0.72$, Pre-Follow で $dz=0.65$ と中等度以上の改善が認められました。APSQ 高群では Pre-Post で $dz=1.21$ と大きな効果がみられ、APSQ 低群でも Follow ま

で効果が維持されました（ $dz=0.6-0.7$ ）。

心理的安全性（SPSI） 時間効果は有意で（ $\chi^2(2)=28.6, p<.001$ ），Pre-Post で $dz=0.65$, Pre-Follow で $dz=0.59$ と中等度の改善が観察されました。APSQ 高群は即時効果が大きく（ $dz=0.72$ ），APSQ 低群はフォローアップ時に比較的高い水準を維持する傾向が示されました。

援助希求意図 41%→53%→50%と増加傾向を示した者の、時間効果（ $\chi^2(2)=1.37, p=0.93$ ）、群効果（ $\chi^2(1)=0.02, p=0.98$ ）、交互作用（ $\chi^2(2)=0.09, p=0.96$ ）いずれも有意ではありませんでした。

精神的健康状態（APSQ）の役割 APSQ スコアは教育効果を修飾する因子として機能しました。高群は「自分事化」が促進されやすく即時効果が大きい一方、低群は安定的に改善を維持する傾向がみられました。教育効果は個人の状態によって異なる可能性が示唆されました。

考察 今回の教育プログラムは、短時間でもメンタルヘルスの知識と心理的安全性を高めることが示されました。一方、援助希求意図には有意な変化は見られず、行動促進には個人教育に加え、チーム全体や組織的ケア体制の整備が必要と考えられます。意義は以下の 3 点です。

- 1)現場実装の可能性：短時間かつ引退後アスリート主体の教育は競技現場に導入しやすいこと
- 2)個別最適化の必要性：精神的健康状態を考慮したプログラム調整が有効である可能性
- 3)包括的展開の方向性：選手個人に加え、指導者やスタッフを含むチーム全体を対象とした教育が援助希求行動促進に不可欠であること

なお、サンプル数が限定的（ $n=34$ 、女性競技のみ）、追跡期間が 2 か月と短期であった点は本研究の限界です。競技種目や性別を拡大し、より大規模かつ長期的に効果を検証する必要があります。本プログラムはアスリート主体の学びを促す実践的モデルとしての有効性を示し、スポーツ現場におけるメンタルヘルスケアの社会実装を進める一助となりうると考えられます。

著者略歴：小塩靖崇（おじお やすたか）東京大学大学院総合文化研究科スポーツ先端科学連携研究機構（UTSSI）特任講師。看護師・保健師、博士（教育学）。メンタルヘルス教育と健康行動科学を専門に、メンタルヘルスリテラシー教育・心理的安全性・援助希求行動の研究と実践を行っている。スポーツや学校での包括的ケアシステムの開発と社会実装を目指している。



バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証
—高齢者の歩行支援への応用を目指して—

脇 遼太郎（東京都立大学）

2025 年 8 月 27－29 日の期間に開催された日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会の健康福祉研究部会の企画で開催されたセッションにおいて口述発表をさせていただきました。今回、演者報告の機会をいただきましたので、発表内容および質疑応答について報告いたします。

近年、高齢者の転倒は社会的な問題になっており、転倒を予防するために様々な側面から研究が行われています。その中で、私は安全な移動に重要であると考えられる歩行中の進路認識に着目しております。人は歩行する際に少し先の情報を未然に認識することで転倒や衝突などを防ぎ、安全な歩行につながると言われております。一方で、いくつかの研究で高齢者は歩行中に足元を注視するということが報告されており、この方略は歩行中の進路認識を困難にさせてしまう可能性があると考えられております。

私たちの研究室では、バーチャルリアリティ（VR）技術を用いて歩行中の進路認識特性を評価する課題を開発してきました。今まで歩行中の進路認識を評価する手法としては視線計測が一般的でありましたが、視線を向けている先を認識しているかを明らかにしておりました。そこで私たちは、歩行路に等間隔で配置した 3 色の四角形のうち、指定された 1 色を連続で踏み続ける課題を、VR 上で再現した VR-MTS 課題を開発しました（図 1：左）。VR 技術を用いて歩行中に 1～3 列先の四角形を白色に隠蔽すると、若齢者は 2 列先までの隠蔽に対しては正確に認識できることが明らかになるなど、歩行中の進路認識を定量的に評価することが可能となりました。

このように、VR-MTS 課題を用いることで歩行中の進路認識の評価が行えることが明らかになりましたが、VR-MTS 課題にはステップ動作を行う上で必要な足部のアバター投影や、課題中の遂行時間や頭部屈曲角度（足元注視の指標）を測定する上で三次元動作解析装置が必要であり、やや測定環境の制約があるシステムでありました。そこで、私たちは VR 機器のトラッキング機能を用いて、VR 機器とノートパソコンのみで VR-MTS 課題が行える簡便な歩行分析システムを開発しました。このシステムは、頭部の VR ゴグルに加えて両足部に付属のコントローラを装着することで、アバターの投影や頭部・足部の動作解析が行えるシステムとなっております（図 1：右）。このシステムを用いることで、測定場所に依存せず VR 課題を実施することが可能となりましたが、このシステムの測定精度についてはまだ検証されていないため、本研究では開発した簡便な歩行分析システムの測定精度を三次元動作解析装置と比較する形で検証することとしました。

10 名の若齢者へ実験に参加していただき、VR-MTS 課題中の課題遂行時間と頭部屈曲角度を三次元動作解析装置と簡便な歩行分析システムで測定し、両条件の測定値の誤差（平均絶対誤差）と類似性（相関係数）を算出したところ、簡便な歩行分析システムで算出した課題遂行時間と頭部屈曲角度は誤差が少なく類似性が高い結果となりました。本研究の結果より、私たちが開発した簡便な歩行分析シ

ステムは三次元動作解析装置に近い測定精度であることが明らかになりました。本研究で開発したシステムは、これまで数千万規模の装置を使って測定していたものを、30 万程度のコストで測定できるため、複数台の測定システムを同時に使用することが可能となりました。さらに、実験室にこだわらず様々な場所で実験の実施とデータ分析が可能となったため、地域の高齢者が集まる体操教室などにシステムを持参し、その場で測定・フィードバックが可能となりました。また、本システムは投影する VR 映像を様々な種類へ変更することも可能であるため、高齢者への歩行支援にとどまらず、スポーツ・リハビリテーションなど多様な分野での応用も可能となりました。

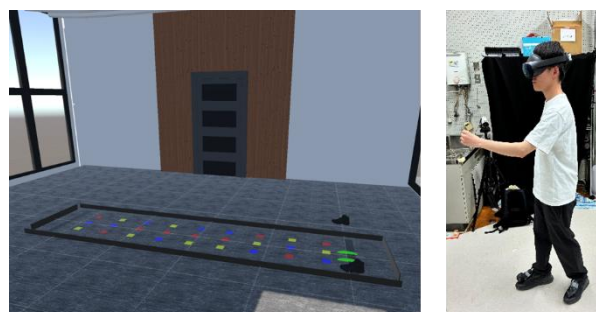


図 1. VR-MTS 課題（左） 簡便な歩行分析システム（右）

発表後にはフロアの先生方から、測定指標の選定理由、VR 環境下の Delay（動作遅延）、なぜ AR（拡張現実）ではなく VR を使用したのか、高齢者の転倒に関連する他の要因についてなど大変貴重な質問やご意見を頂戴しました。また、発表後も多くの先生方と開発したシステムの応用方法について議論を行う機会もいただきました。いずれ内容も重要かつ示唆的であり、今後の研究に役立てられるよう検討を続ける必要性を感じました。こうした貴重なお意見を頂くことができ、改めて学会発表の重要性を実感することができました。

著者略歴：北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科理学療法専攻卒業。東京都立大学大学院人間健康科学研究科博士前期課程終了。現在、東京都立大学大学院人間健康科学研究科の博士後期課程に在籍。VR 技術を用いた運動制御に関わる知覚・認知の特性に関する研究を行っている。



この度、2025年8月27日～29日に開催されました、日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会において、ポスター発表をさせていただきました。その際の発表および質疑応答の内容について、寄稿の機会を賜りましたので、僭越ながらご報告申し上げます。

本学会では、運動の結果に伴う報酬や損失といったインセンティブがリスクテイキングに及ぼす影響と、関連する心理特性を検討した研究について発表を行いました。スポーツの試合では、スコアでリードすると慎重でリスク回避的な選択が増え、ビハインドでは勝負に出るリスク志向的な選択が増えると報告されています(Yang & Zhao, 2023)。しかし、どの程度リスク回避的、志向的になるのか、その程度は十分に定量化されていません。プロスペクト理論によると、ヒトは利益より損失に敏感で、損失を避ける選択に傾きやすいとされています(Kahneman & Tversky, 1979)。つまり、行動の内容は一緒でも、「報酬獲得を目指すのか」それとも「損失回避を目指すのか」で、感じる価値やリスクの知覚が変わります。この違いが実際の運動にどれほど現れるか、十分に検証されていると言えません。また、価値判断やリスクの知覚、そして実際の意思決定や行動は、ヒトによって様々です。そこで本研究では、インセンティブがリスクテイキングに及ぼす影響と、関連する心理特性を明らかにすることを目的として検証を行いました。

実験対象者8名は、台形の得点フィールドに向かってボールを下手投げで投球し、落下した地点の得点を獲得または損失しながら、20回の試行で得点を最大化することを目指す課題を行いました。課題は3条件でした：①報酬のみ与えられる条件(Reward Condition: RC)、②損失のみ与えられる条件(Loss Condition: LC)、③報酬と損失がともに与えられる条件(Mixed Condition: MC)。全ての条件とも、奥を狙えば大きな報酬を獲得、または大きな損失を回避することができますが、奥につれて横幅が狭くなるため外れてしまうリスクも大きくなる課題でした。課題の開始前に対象者は、①MSRS(The Movement-Specific Reinvestment Scale, 川端・今中, 2019: 動作への再投資傾向を評価)、②GSES(The General Self-Efficacy Scale, 板野・東条, 1986: 一般性自己効力感を評価)に回答しました。

結果としては、RCとLC間のリスクテイキングに有意傾向の差が見られ、RCよりもLCでリスクを回避し、MCで最もリスク回避的になりました。また、MSRSの下位項目であるCMP(動作過程への再投資傾向)とリスクテイキングに有意な相関が見られました。これらの結果は、プロスペクト理論における損失回避性で説明されるように、運動の結果に基づいて得点を取る、または失点を回避するといった場合においても、報酬よりも損失を回避する傾向が強い可能性を示しました。また、どのように身体が動いて

いるかチェックする傾向が強い人ほど、リスクを回避する傾向があるといった心理特性と関連する可能性も示唆されました。

先生方、並びに大学院生からいただいたご質問から2点取り上げさせていただきます。

最も多くご質問をいただいたのは、「なぜこのような実験課題を設定したのか」についてです。実験課題を作成するにあたって主に以下2点のことを満たすよう努力しました。1点目は、実際のスポーツに近い動作を用いることです。従来の研究では、機械のハンドルを用いたリーチングや、指でタッチするような運動課題が多く用いられてきました。しかしながら、単純な動作ではスポーツの実動作における動きの不確実性を十分に再現できず、応用可能性に欠けることを懸念したため、本実験課題のようなボールを用いた下手投げによる運動を採用しました。2点目は、過度にリスクを取りすぎると損失を被る仕様にすることです。野球の投球や、テニス・バレーボールのサーブ、サッカーのシュートなど、境界線(ストライクゾーンやコートライン、ゴールなど)の外は全くの無報酬となる競技が多数存在しています。これらのような競技に一般化されるような知見になればと思い、得点フィールドの着想を得ました。

ご質問の2点目は、「RCとLCのリスクの差は有意傾向であったことをどのように考察するか」についてです。本研究の結果では、プロスペクト理論で説明されるような損失回避性は明確に示されず、可能性に留まる結果となりました。この理由は、サンプル数が少ない点や、対象者が実質的な損失を被らない点にあると考察しています。本実験のLCでは、初期の持ち点を200点としてスタートさせ、得点を「減少させないこと」を目指して取り組んでいたため条件となっていました。しかしながら、初期状態がプラスであることは、得点の減少を「損失」と捉えなかった可能性が考えられます。今後は適切なサンプル数と、実験課題を改善、応用しながら研究を進めて参りたいと思います。

この度の発表では、専門分野を問わず様々な方と議論させていただき、本研究を深め、発展させる充実した機会となりました。改めまして、本大会の開催にご尽力くださった大会実行委員会の先生の皆様、学会運営関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

著者略歴：北海道教育大学旭川校保健体育分野卒業、現在は筑波大学大学院人間総合科学術院体育学学位プログラムに所属。スポーツにおけるプレー選択のリスク調節を中心に、意思決定と運動パフォーマンスに関する研究を行っている。



2025年8月27日（水）から29日（金）にかけて、日本体育大学世田谷キャンパスにて開催された日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会に参加させていただきました。この度の「大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会参加助成（体育心理学専門領域）」を賜り、貴重な機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

私はこれまで口頭発表の経験は幾度かありましたが、ポスター形式での発表は初めてであり、準備段階から多くの学びを得ることができました。発表当日は、多くの先生方や学生の皆様にポスターをご覧いただき、研究内容について直接ご意見やご質問をいただくことができました。ポスター発表は、発表者と聴衆が自由に対話できる形式であるため、研究の背景や方法のみならず、実際の支援現場における課題や今後の応用可能性など、幅広い議論が交わされました。こうした双方向的な交流を通じて、自身の研究を多角的に見つめ直す貴重な機会となりました。

私の発表タイトルは「デファスリートへの心理支援が心理的能力に及ぼす影響—JISS 競技心理検査による検討—」でした。2025年は4年に1度開催されてきたデフリンピックが100年の節目を迎え、第25回大会が東京にて開催される年であります。デファスリートは、競技中の情報伝達の制約や社会的な誤解・偏見など、特有の心理的・社会的課題に直面しています。そのため、心理的負担が大きく、自己理解やメンタル面での自己調整に関して十分な支援を受けにくい現状にあります。一方で、健常アスリートを対象とした研究では、心理支援の有効性は示されているものの、デファスリートを対象とした検討は十分とはいえません。こうした背景を踏まえ、本研究では、デファスリートに対する継続的かつ個別的な心理支援の有効性を検討しました。

プレッシャー下での実力発揮を目指すデファスリート1名を対象とし、SMT指導士による心理的スキル学習とカウンセリングを組み合わせた心理支援を月1回実施しました。2か月ごとにJISS競技心理検査を行った結果、支援開始6～8か月以降に自己コントロールや自信を中心とした心理的能力の向上が確認されました。主観的変化は、前期の意識・理解段階から、後期には思考のクセを把握・修正するメタ認知的視点へと発展しました。

本研究における心理支援の目的は、「自己理解」の向上を足掛かりとして「心理的スキル」の発達を促すことでした。そのため、支援の過程では、対象者が自身の思考や感情のパターンを客観的に捉えられるよう、SMT指導士による心理的スキル学習とカウンセリングを組み合わせた支援を継続的に行いました。その結果、健常アスリートで報告されている傾向と同様に、心理的スキルの向上およびメタ認知の発達が確認されました。特に、「自己理解」を深める支援を通して、対象者は自身の「思考のクセ」を把握し、それを意識的に修正する視点を獲得しました。このような変化は、情報伝達の制約や社会的偏見といったデファスリート特有の課題を抱える選手においても、体系的な心理支援が

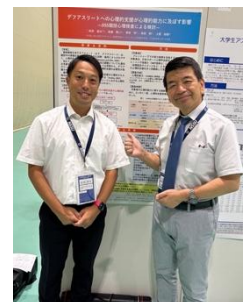
有効に機能し得ることを示す示唆的な事例であると考えられます。さらに、本研究では「競技専心性」の向上も確認され、「自己理解」の深化を支援の基盤とするアプローチが、競技への集中や安定性の向上にも寄与する可能性が示唆されました。これらの結果から、SMT指導士による「自己理解」を中心とした支援は、デファスリートにおける心理的スキルや競技専心性の向上を促す上で、支援の重点領域となる可能性が示されました。今後の課題としては、本研究が1名のアスリートを対象とした事例であることから、複数選手への適用やグループ介入との比較検討、さらにデファスリートの特性に即した支援内容の最適化が求められます。

私は普段、SMT指導士として障がいの有無に関わらず、アスリートの心理支援を行っています。心理支援の基本原則は障がいの有無にかかわらず共通ですが、支援の方法には各障害特性に応じた工夫が不可欠であり、その理解を踏まえた支援こそが重要であると考えています。

本大会では、さまざまな専門領域の研究発表を通じて、心理支援の在り方について改めて考える機会となりました。特に、障がい者スポーツや現場実践に関する発表からは、研究成果をどのように現場へ還元し、アスリート一人ひとりの状況に応じた支援へとつなげていくかという点で多くの示唆を得ました。また、他分野の研究者や学生の方々との意見交換を通じて、自身の研究や実践をより広い視点から捉え直すことができました。こうした学びを踏まえ、今後はデファスリートを含む多様な競技者が、それぞれの特性を活かしながら自分らしく競技に向き合えるような心理支援の体系化を目指し、実践と研究の両面から取り組みを進めてまいりたいと考えています。

末筆ではございますが、本大会開催にあたり、多大なるご尽力を賜りました大会組織委員会・実行委員会をはじめ、諸先生および全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。最後になりますが、この度の「大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会参加助成（体育心理学専門領域）」に採択していただきましたこと、誠にありがとうございました。今後も体育・スポーツ・健康科学のさらなる発展に寄与すべく、研鑽を重ねてまいります。

著者略歴：大阪体育大学体育学部卒業、大阪体育大学大学院博士前期課程修了。青森県スポーツ科学センターを経て、現在は大阪体育大学大学院博士後期課程在籍ならびに和歌山県立医科大学げんき開発研究所研究員。日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士。日本オリンピック委員会強化スタッフ。主な研究テーマは、プレッシャー状況に関する研究およびパラアスリートの心理に関する研究。
（写真左は筆者、右は指導教員の土屋裕睦教授）



II. 研究会の活動報告

2025 年 8 月 7 日（木）、8 日（金）の 2 日間、十文字学園女子大学において、2025 年度第 33 回運動学習研究会を開催いたしました。この研究会には私も大学院生の頃から、かなり鍛えられた、と言いますか、かなりお世話になってきています。この会を通じて知己を得た先生方も多くです。この会を目標に進めてきた研究もあります。ようやくこの齢になって、所属先で研究会を開催できることを、個人的にとっても嬉しく思いました。研究会はこちらのリソースと技術不足ゆえ、完全に対面形式で行いました。それでも運動制御や運動学習に携わる研究者が一堂に会し、最新の研究成果の共有と議論を深める場となりました。暑い盛りではありましたが、本年度の研究会には、学部生からレジェンド級の先生まで、北は北海道から、南は鹿児島まで総勢 16 名の方々にお集まりいただきました。そのうち、学部生をはじめ初参加の先生方も 6 名いらっしゃり、新たな顔ぶれを迎え、活気に満ちた 2 日間となりました。

発表された研究テーマは、力学系理論に基づく運動解析から、脳波を用いた生理学的アプローチ、ベイズ推定、さらには、動作解析への機械学習の援用に至るまで、多岐にわたるアプローチがみられました。これらの研究手法は高度ではありますが、議論の根底にあるのは『選手はどう感覚を掴むのか』『どうすれば上達を支援できるのか』という、体育心理部会のみならず、切実な問いだと思います。それぞれの発表では、理論から実践まで、幅広い視点での活発な議論が展開されました。

発表タイトルおよび発表者は、次の通りでした（敬称略）：

- ・ブランコ座面上で生じる慣性力の理論的評価と体動への影響（北原俊一・十文字学園女子大学）
- ・皮質内回路の興奮性と系列運動学習速度との関係（松嶋健介・山梨大学大学院）
- ・ハンドボールにおける 7MT に対する GK の選択反応時間（平川武仁・大阪体育大学、下川真良・大阪体育大学）
- ・皮質運動マップの重複面積は新規スキル獲得に関連する（関口浩文・山梨大学）
- ・タイミング行動における複数の事前分布の学び分け（宮崎真・静岡大学）
- ・動作解析における機械学習手法の応用可能性を探る（高御堂良太・鹿屋体育大学）
- ・身体へのアテンションによってイップス選手特異的に生じる皮質脊髄興奮性の増大（山崎大輝・東京大学大学院）
- ・子どもの遊びに対する対称性の破れとスポーツのチームワークへの適用可能性（木島章文・山梨大学）
- ・大学運動部における合宿がもたらすチームダイナミクスの変容（永原新也・東京大学教育学部）

本年度の特筆すべき点として、例年以上にフロアからの質疑応答が極めて活発であったことが挙げられます。両日

のセッションともに、会場にいたほとんどの参加者が質問やコメントを投げかけ、発表者と参加者が一体となって研究の本質に迫る熱い議論が繰り広げられました。

また、研究発表後に行われた懇親会においても、その勢いは衰えることがありませんでした。会場を移してからも研究への情熱あふれる闊達な議論や、オモロイトークが続きました。世代や所属を超えた交流が深まり、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。

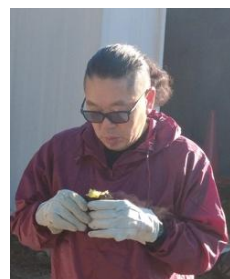
さすがに近年は、時間無制限・一本勝負のような研究発表はなくなりましたが、30 年以上続いてきた運動学習研究会の運営方法や雰囲気といった土台の部分は、ほとんど初期のまま引き継がれてきました。今年の研究会では、その流れを引き継ぎ、会の長所を継承しつつ、変える必要のある部分は柔軟に改良し、新たな展開を作り上げよう、という話もありました。この研究会が、これからどんな発展を遂げていくのか、とっても楽しみです。

最終日には、若手研究者の優れた発表を称える「門田浩二賞」の選考が行われました。この賞は、運動学習研究会の発展に貢献された故・門田浩二先生を偲んで設立された賞です。厳正なる審査の結果、永原新也氏、松嶋健介氏、山崎大輝氏の 3 名が受賞されました。おめでとうございます。受賞された方々の益々のご活躍を心より祈念申し上げます。

来年度の第 34 回運動学習研究会（'26 JMLS）は、木島章文先生、関口浩文先生のご厚意により、2026 年 8 月 10 日（月）・11 日（火）に山梨大学で開催される予定です。次回も多くの皆様とお会いできることを楽しみにしています。



著者略歴：筑波大学第二学群人間学類卒業。筑波大学大学院体育科学研究科単位取得満期退学。博士（体育科学）。現在、十文字学園女子大学教育人文学部心理学科。学生と体育実技に取り組みつつ、心理学実験や研究法を学んでいる。整然とした物理則と、非線形で生々しい心理との接点に興味がある。右投げ右打ち。マイナ保険証未取得。



本研究会は、スポーツ選手の眼球・視機能をサポートしている眼科医、松原正男氏と枝川宏氏により設立された研究会である。スポーツと視覚の関係を科学的に議論するためのプラットフォームとして設立された。過去15年間にわたる研究会では、申請者をはじめ、複数の体育心理学専門領域に属する研究者が話題提供者ならびに参加者として貢献している。

第16回大会は、11月22日（土）16:00-18:00にオンラインにて開催された。参加者数は最大で60名程度であった。このうち、体育心理専門領域の会員参加者は10名程度であった。研究会ではフェンシングという競技に焦点が当てられ、1名の現役トップ選手へのインタビューを交え、3名の研究者から話題提供を頂き、「エリートフェンサーは何を見ているのか？」というテーマについて議論を深めた。

初めに、慶應義塾大学環境情報学部に加藤貴昭先生より、本研究会においてフェンシングを主題として取り上げる意義についてご紹介いただいた。続いて、慶應義塾大学総合政策学部在籍し、現役フェンシング選手として国内トップレベルで活躍されている飯村一輝選手へのインタビューが行われた。インタビューでは、競技中の情報処理や判断過程を言語化していただき、知覚・判断・予測をコンマ数秒という極限状況で遂行する難しさと、それに対する工夫が示された。また、空間全体を見るという特有の感覚や、ゾーン体験についての貴重なお話も伺った。インタビュー後には、加藤先生より、飯村選手を対象に実施した計測データが提示され、科学的分析が行われた。特に眼球運動データから、エリートフェンサーは上半身付近に視点を安定させ、周辺視を活用して全体を把握するという視線行動の特性が明らかにされた。

次に、現在は慶應義塾大学総合政策学部所属し、元ロンドン五輪銀メダリストでもある千田健太先生にご登壇いただいた。千田先生からは、選手としての豊富な経験に加え、現在ご自身で進められている研究事例についてご紹介いただいた。選手時代のプレー映像とバイオメカニクス研究の双方から、動作や反応のスピードと予測の重要性について丁寧に説明いただいた。また、空間全体を把握することで距離感を正確につかみ、それに伴う視覚的な判断によって、試合中の最速の反応がなされていることを解説いただいた。

続いて、株式会社ユーフォリアに所属し、フェンシングナショナルチームのアナリストも務めている千葉洋平先生にご登壇いただいた。千葉先生からは、アナリストとしての立場からエリートフェンサーのパフォーマンス分析に関する知見が示された。フェンシングの試合構造を整理したうえで、データ分析手法や導入過程を具体的に解説していただいた。パフォーマンス分析が選手やコーチの意思決定支援のツールとして、さらには選手自身のバイアスに気づくための契機として極めて重要であることが強調された。

最後に、総合討論が行われた。加藤先生の進行のもと、多くの質問や意見が各話題提供者へ寄せられ、時間の許す

限り活発な議論が展開された。特に、講演中に取り上げられた空間知覚、ゾーン体験、データ分析といったテーマを軸に、他スポーツの研究知見との比較を交えながら、エリート選手に共通する特徴や、エリートフェンサー特有の行動について議論が深められた。本討論を通じ、フェンシングをはじめとするトップアスリートの視覚的特性に関して理解が一段と深まった。

著者略歴：p.15の右段を参照。

【はじめに】

今日、日本のスポーツ界は、指導者による暴力をその喫緊の問題の皮切りとして、セーフスポーツの実現を脅かす数々の困難に直面しています。他方で、スポーツ心理学やコーチング学といった多様な研究領域から発信されてきた従来のセーフスポーツに関する一連の研究を統合的に議論し、分野融合的な示唆を得るようなムーブメントは未だ起こっていない実情があります。そこで、個々の学術的・実践的専門性を持ち寄った継続的な研究実践活動・交流を通じて、セーフスポーツの実現に貢献する学際的知見の創出・発信を目的として、2025年4月より、セーフスポーツ研究会（STEP: Safe Sport, Theory, Ethics, and Practice）を立ち上げました。2026年3月時点でのメンバーは17名で、幅広いキャリアとバックグラウンドを持った仲間恵まれ、毎回ユニークで活発な議論が繰り広げられています。

本稿では、STEP発足当時の約1年間の活動概要を記すとともに、体育心理学専門領域研究会助成を受けて開催された特別講演会の報告をさせていただきます。

【定例研究会での活動】

約2ヶ月に一度の頻度でオンラインにて開催され、発足1年目である本年度は、メンバーの研究実践活動の内容紹介を中心として下記の概要のもと有意義な交流が行われました（以下、メンバー敬称略）。

- ・第1回（2025/5/28）：顔合わせ、STEPの企画趣旨説明
- ・第2回（2025/7/29）：「諸外国から学ぶセーフスポーツ：安心・安全なスポーツ環境の構築に向けて2025」（JSPQ, 2025）を題材とした議論（豊田隼・東京大学）
- ・第3回（2025/9/16）：研究発表「スポーツドラマチック体験とレジリエンス」（堤愛美子・九州大学大学院）、「指導者の暴力に対する親の通報意図と指導者への感謝の関係」（久保昂大・熊本学園大学）
- ・第4回（2025/11/18）：研究発表「コーチ育成の現在」（山田快・法政大学）、「イップスと暴力」（池田和司・日本経済大学）
- ・第5回（2026/1/27）：「運動部活動顧問教諭のメンタルヘルス」（荒山美月・国際医療福祉大学大学院）、「アスリートの心理臨床の傍らで」（宇土昌志・宮崎大学）
- ・第6回（2026/3/31）：「運動部活動指導者のサーバントリーダーシップとパワーハラスメントの関連：選手と指導者の人間関係による媒介効果」（堀本菜美・順天堂大学）

【第1回特別講演会の開催】

セーフスポーツの実現を研究実践の立場から志向する際に重要となるのが分野融合的な学際連携です。セーフスポーツに関する海外制度に精通し、日本でのアドボカシー活動に精力的に取り組まれている弁護士の方の杉山翔一氏（Field-R法律事務所・ジャパンセーフスポーツプロジェクト代表）をお招きして、第1回特別講演会を開催しました。講演会当日（2026/2/24）は、多くのSTEPメンバーに加え、一般社団法人S.C.P. Japan代表理事の井上由惟子氏と

いった複数の実践家や元アスリートの方々にもご参加いただきました。

「スポーツ法学の観点から見たセーフスポーツの実現に向けた日本の課題と展望」と題された杉山氏のご講演では、日本の法政策やスポーツ団体の制度的現状とその課題、アメリカのセーフスポーツセンターの実態、ジャパンセーフスポーツプロジェクトでの活動報告をしていただきました。また、暴力事案を想定した架空のケース提供も含め、異分野（スポーツ法学）ならではの視点から大変貴重なご講演をしていただきました。

ご講演終盤には、セーフスポーツに関する多領域からの知見を如何にして日本の文化・法制度に落とし込んでいけるのか、各分野の強みを活かした専門的な知見を如何にして編んでいくべきなのか、今後のセーフスポーツにかかわる学際連携に向けた大切な問いかけもいただきました。その後のディスカッションでは、スポーツにおける暴力の法的な根拠やその範囲に関する理論研究と実践現場でのギャップ、また、改正スポーツ基本法の役割とスポーツ基本計画への影響などについての意見交流が行われました。加えて、コーチング場面でのトラウマケアのあり方といったミクロな点から、日本のスポーツ文化・組織文化を能動的に更新していくための長期的な展望といったマクロな点まで、幅広いスケールが活発に展開されていたことが印象に残っています。さらには、スポーツにおける暴力をインテグリティの問題として捉えるのか、はたまたメンタルヘルス/サバイバーの問題として捉えるべきのか、という今後の研究実践の立場性に直結するやり取りも興味深いものでした。改めて、体育・スポーツ科学の専門領域を越境した学際的な議論の面白さ、奥深さを感じることができたように思います。

【おわりに】

STEPの研究実践活動は、まだスタートラインに立ったばかりです。私自身、僣越ながら世話人を務めさせていただいておりますが、初めての研究会運営という経験の中で、メンバーの仲間に多方面で支えられてきました。今後は、研究会HPの開設とそこでの研究成果の発信、研究会の対面開催等も順次進めて参りますので、関心をお寄せいただける方のご参加をお待ちしております。最後になりましたが、この度の体育心理学専門領域研究会助成に採用いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

著者略歴：山梨大学大学院医工農学総合教育部修了。博士（生命医科学）。現在は、特任研究員（日本学術振興会特別研究員PD）として東京大学教育学研究科臨床心理学コースに所属。主な研究テーマは、指導者による暴力問題。特に、被害者のトラウマといった精神健康問題、暴力に対する容認的態度が温存される社会規範に関心がある。



第20回スポーツ動機づけ研究会は、会員の研究報告の場を提供するとともに、会員相互の情報交換を図るため、令和7年11月8日（土）・9日（日）の2日間にわたり、名古屋経営短期大学において開催されました。本研究会は、長年にわたり会長としてご尽力くださった西田保先生から新執行部に引き継がれて初めての開催であり、節目となる第20回という記念すべき会でもありました。全国各地から研究者・大学院生・実践者などが参加し、約20名の参加者によって活発な意見交換が行われました。

最初のプログラムとして「大学授業の動機づけ」をテーマとしたワークショップが行われました。参加者を4グループに分け、それぞれのテーブルで意見交換がなされ、その後、グループで整理された情報を参加者全員で共有し、活発な議論が行われました。大学教員及び大学院生のそれぞれから多くの事例が共有され、教育実践の改善につながる具体的な有意義な議論がなされました。

続いて「研究たまごトーク」では、5名による発表が行われました。札幌学院大学の平間康允先生からは、「野球選手における胸郭出口症候群と不安傾向との関連について」、日本女子体育大学大学院の高橋沙也花さんからは、「女子大学生スポーツ選手の月経に関する認知的評価の検討」、日本大学大学院の鎗田怜次郎さんからは、「ボクシングにおけるスランプの発生機序及び対応策に関する質的研究」、名古屋経営短期大学の武田直之先生からは、「スポーツ活動を通じた環境教育プログラム」、北星学園大学の蓑内豊先生からは、「個人に応じた動機づけ方法」という研究の構想が提示され、相談と助言が行われるとともに、新鮮な雰囲気の中で活発な議論が交わされました。いずれの発表も構想の段階ではありますが、どの研究もチャレンジングなものであり、参加者全員が惹きつけられるような新しい議論の流れを感じました。夕刻には名古屋産業大学の上島春喜先生による「筋トレの動機づけ」と題した実技セッションが行われ、ウェイトリフティングの体験を通して動機づけを理解する大変貴重な機会となりました。

2日目は研究ディスカッションから始まりました。日本大学大学院の高井美莉衣さんからは、修士論文「大学競泳選手の競技継続に影響を与える心理学的検討ー自己調整学習方略の観点からー」の発表があり、昨年からの成長がうかがえました。また、国立スポーツ科学センターの永尾雄一先生からは、これまで制作されたモチベーションビデオの変遷が具体的に紹介され、実践に根ざした大変興味深い発表がありました。研究ディスカッションは、研究たまごトークよりも先に進んだ段階の発表ということもあり、進捗状況で議論の内容が異なることを実感する機会となりました。そして、シンポジウムでは、日本大学の北村勝郎先生と著者（藤田勉）から、「高齢者の動機づけ」として運動継続研究の新展開の提案があり、活発な議論が行われました。また、2日間を通して西田保先生からは随所で貴重な助言とご指導を賜り、議論の質が一層深まりました。

第20回を迎えた本研究会は、幅広いテーマを通じて、動

機づけを多面的に捉える視座を共有する場となりました。また、新しい企画が加わり、若手研究者の発表機会も充実し、今後の研究発展への期待が高まりました。今回の成功は、これまで本研究会を長きにわたり支えてこられた西田保先生のご尽力と、その精神を引き継ぐ新体制による協働の成果でもあります。最後に、会場の設営・運営にあたってくださった名古屋経営短期大学の武田直之先生ならびに関係者の皆様をはじめ、多くの方々のご尽力に心より感謝申し上げます。



Ⅲ. 研究室紹介

1. 研究のテーマと自己紹介

私はスポーツ場面におけるリーダーシップの研究に取り組んでいます。しかしながら、私自身はスポーツ活動の中でも他の場面でもリーダーの役割を担った経験はなく、むしろ、そのような立場を避けてきた人間でした。リーダーは、一部の向いている人が務めるもので、自分がそのような役割を担うことなど考えたこともなかったです。そんな私がリーダーシップに興味を持つようになったのは、アメリカで大学院生活を送っていたときでした。大学院で様々な活動をする中で、自分がリーダーとしての役割を期待され、リーダーシップの発揮を求められる場面が増えていきました。リーダーになることを避けてきた私ですが、そんなことも言っていられず「どうすれば良いリーダーになれるのだろう？」と考えを巡らせるようになりました。そこから、自身のスポーツでの経験も振り返り、スポーツ場面でのリーダーシップに興味を持つようになりました。これが、私がこの分野の研究を始めたきっかけです。

そうして研究する中で次第に実感したのは「誰もがリーダーになることの重要性」です。リーダーシップは一般的に「個人が組織の集団目標の達成に向けて、組織のメンバーに影響を与えていくプロセス」(Northouse, 2021)と定義されています。この定義に基づく、例えばスポーツの場面においては、キャプテンなどの役職を持っていなくても、チームの他のメンバーに共通の目標の達成に向けて何らかの影響を与えていれば、それはリーダーシップであると言えます。リーダーとフォロワーの境界は曖昧で、誰にでもリーダーシップを発揮すべき場面があります。必要なときに、周囲に前向きな影響を与えられるリーダーが一人でも増えれば、(少しおおげさかもしれませんが)それは世界平和にもつながるのではないかと思います。という経緯から、私は「リーダーとしてのポテンシャルを引き出していくこと」ことを自身のミッションとしています。かつてはリーダーなんて縁がないと思っていた私ですが、リーダーシップを学び、その考えは大きく変わりました。研究室に来てくれる学生や関わる人達が、自身のリーダーとしての可能性に気づき、発揮できるようにという思いを持って、教育・研究・実践活動に取り組んでいます。

2. 大阪体育大学について

大阪体育大学は、大阪府泉南郡熊取町に位置するスポーツ科学と教育を基盤とした私立大学です。学内には6つの専用体育館と様々な競技場が整備されており、学生の約7割が部活動に励んでいます。

本学には、スポーツ科学部と教育学部の2つの学部があり、私が所属するスポーツ科学部には、6つの専門コースが設置されています。私が担当教員を務めるスポーツ心理・カウンセリングコースでは、全国的にも珍しいスポーツ心理学に特化した教育を展開しています。

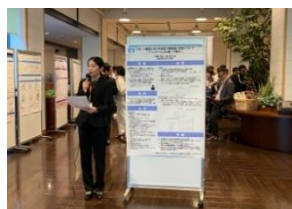
そして大学院スポーツ科学研究科には、博士前期課程(修士課程)、博士後期課程(博士課程)が設置されています。近年は、夜間の授業開講が開始され、社会人の大学院生も多く在籍しています。スポーツ心理学分野の修士生は、

大学や研究機関で、教育・研究に携るほか、メンタルトレーニングの専門家やコーチとしてスポーツの現場で活躍するなど、多様なキャリアを築いています。

3. 研究室の研究紹介

私の研究室には、現在大学院博士前期課程の学生4名と、スポーツ科学部の3年生6名、4年生6名が所属しています。まず大学院では、リーダーシップを含む様々なテーマで、スポーツ心理学の理論やスポーツ現場に貢献できるような研究に取り組み、それを論文(修士論文)としてまとめることを目指しています。大学院で初めてスポーツ心理学を学ぶ大学院生もいるので、海外の教科書を輪読しながら、理論や実践についての知識・理解を深めることも行っています。

また、大学院生は学会参加や学会への発表にも挑戦しています。右の写真は、昨年度、博士前期課程を修了した端岡里紗さんの日本生涯スポーツ学会大会での発表の様子です。研究室では、じっくり研究を進めており、学生は在学期間中に多くの学会発表はできていないのですが、端岡さんはこの大会で、大学院生ポスター発表部門で最優秀賞を受賞しました(学会で様々なフィードバックを頂けて、さらにその後、本学大学院の優秀論文賞も受賞しました)。研究室に所属するスポーツ科学部の3年生、4年生も、それぞれが自身で興味を持てるテーマを見つけ、論文を読み、研究方法を学びながら、卒業研究に取り組んでいます。後期の終わりには、3年生、4年生、次年度に研究室へ配属予定の2年生、そして大学院生が合同で研究の成果発表会を実施しています。右の写真は、卒業論文を発表する4年生の写真です。



4. 最後に

このように研究室では、リーダーシップをテーマに活動を行っています。リーダーシップに限らず、教育・研究・実践についての議論が大好きです。近くに來られた際は是非遊びにいらしてください。

著者略歴: 高校卒業後、約10年間を米国で過ごし、2012年Michigan State University 博士課程終了。Ph.D. in Kinesiology. 2012年大阪体育大学大学院助手、2013年順天堂大学助教を経て、2015年大阪体育大学体育学部(現スポーツ科学部)に講師として着任。2017年から准教授、現在に至る。Journal of Applied Sport Psychology 編集委員会メンバー、Association for Applied Sport Psychology, Certified Mental Performance Consultant®



IV. サテライト企画：学位論文発表

2025年7月29日、本企画において学位論文を発表させていただきました。本論文は東京大学大学院総合文化研究科工藤和俊教授のご指導のもと書き上げるに至りました。今回は、学位論文の概要および発表後の議論の内容、今後の研究について報告させていただきます。

本研究を始めるきっかけとなったのは、自らが長距離走に取り組む中で「どうして他者と走ると楽に感じたり、タイムが改善したりするのだろう」と疑問に思ったことでした。実際、短距離走から長距離走まで、走力が近い他者と共に走ることで個人のパフォーマンスが有意に向上することが知られています(Tomazini et al., 2015 など)。他者がパフォーマンスに影響を及ぼす要因の1つに、近くの他者と運動のテンポを合わせてしまう「対人間の同期現象」があると考えられています(Varlet & Richardson, 2015)。近くの走者同士で、ステップ時刻やそのテンポが近づいてしまう傾向（走者間の同期）のことです。著者は特にこの同期現象に着眼して研究を進めました。

まずは初めに、この現象の有無を検証した研究が不足していたため、短距離走や長距離走における国内トップレベルのレース動画を対象として同期生の評価を行いました。各選手のステップ時刻の同期性を分析した結果、2人のステップ時刻のずれ度合いを示す相対位相が 0° （同位相）または 180° （逆位相）付近に有意に局在しており、走者間の同期現象の存在が示唆されました。

次に、走者間の同期がどのようなメカニズムで生じるかを明らかにする一端として、同期を引き起こす知覚情報について検討しました。まずは聴覚情報（足音）に着眼した実験を行いました。隣接する2台のトレッドミル上を2人（実験参加者と実験協力者）が同じ一定速度で並走し、協力者が参加者に知られないようにピッチを速く、または遅くしました。2人の間に薄い壁を置くことで、互いの視覚情報を遮断し、足音のみが作用する状況にしました。協力者のピッチを速く、または遅くする複数のテンポ条件を行った結果、遅くした条件において、他者の足音がない対照条件と比べて参加者のピッチが遅くなりました。このことから、隣接走者の足音がピッチに影響を及ぼすことが明らかになりました。一方、ピッチが増加する方への影響は限定的でした。

また、視覚情報に着眼した実験を行いました。前後に並べた2台のトレッドミル上を2人（実験参加者と実験協力者）が走り、その2人の前後関係を入れ替えることで、参加者が協力者から受ける視覚情報の有無を操作しました。まずこの実験においても、聴覚情報が参加者のピッチに影響を及ぼすことが確認されました。特に協力者のピッチが遅くなる条件において、参加者のピッチが有意に低下しました。一方、参加者が後方を走る条件（参加者は協力者からの視覚・聴覚情報を両方受ける）と参加者が前方を走る条件（協力者からの聴覚情報のみ受ける）とで同期の程度に差はありませんでした。すなわち、視覚情報を追加しても聴覚情報のみの同期効果を上回ることはありませんでした。また心拍数に関しては、前方走者の視覚情報がある条

件で、有意に低下しました。これらの結果から、走者間に視聴覚を介した相互作用があることが示され、特に聴覚情報がピッチの同期に寄与し、視覚情報は生理的負荷軽減に関与する可能性が示唆されました。

これらの成果は、スポーツにおける対人間相互作用メカニズムの解明に繋がり、相互作用を応用したトレーニング法の開発および戦略的活用によるパフォーマンス向上に寄与することが期待されます。

発表後は参加者の先生方と質疑応答を行わせていただきました。いただいたご質問の1つは、実験方法に関するもので、「サクラ役であった実験協力者のピッチ変化は、どれほどの時間をかけて行ったか」というものでした。本実験では、5秒間かけてそのピッチ変化を行いました。この変化時間次第では同期性が変わる可能性があります。より短い/長い時間幅での変化刺激により、同期効果が下がる/高まることも考えられ、今回の結果の解釈や実践応用する上で今後検討を重ねるべきポイントの1つになります。

他にも「実験室における今回の実験結果は、グラウンドにおける実走とどのような関係にあるか」というご質問もいただきました。まず前提として、本論文の実験は、一定速度でベルトが流れるトレッドミル上で行ったため、ピッチと歩幅（ストライド長）が常に反比例する形で走速度が一定に保たれます。特にこの点は実走と大きく異なり、今回の結果の解釈を実走にそのまま適用できない理由の1つになります。これまで実走での実験も行いましたが、生じるピッチ変化が同期依存か意思決定（前に出た選手を追いかける等）依存か、要因の切り分けが難しくなる問題が生じ、現在有効な実験方法を模索している段階です。

今後の発展として2つの方向性を考えています。1つは、2者間の関係性をより探求し、同期を含めた相互作用の理解をより深めること。もう1つは、より多人数の「集団」に視点を広げることです。ランナーの興味深い性質の1つに「集団形成」があります。今後は集団形成現象をより深く理解し、パフォーマンスの改善・抑制要因の発見に繋げていければと考えています。自らも走りながら現象を観取し、対話や分析を重ね、身体運動への理解に貢献していければ幸いです。

著者略歴：2019年熊本大学教育学部卒業。2021年九州大学大学院人間環境学府修士課程修了。2025年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（学位：学術）。同年1月、箱根駅伝に出走。現在、京都工芸繊維大学情報工学・人間科学系（特任助教）に所属。ランナー間の相互作用と集団形成ダイナミクスに関する研究を行う。



2025 年 8 月 4 日に実施された体育心理専門領域のサテライト企画「学位論文発表企画」において、大阪体育大学大学院で取り組んだ学位論文の内容を発表させていただきました。ここでは、学位論文の概要と発表後の議論の内容、今後の展望について報告させていただきます。

学位論文の題目は「条件統制下における運動負荷が起床時コルチゾール反応に及ぼす影響」でした。過負荷の運動は、個人の適応能の範囲内で課された場合、運動適応が生じ、身体の諸機能が向上します。一方で、個人の適応能を超える過負荷は不適応を引き起こし、身体の諸機能の消耗・破綻を引き起こす可能性があります。この不適応の状態を早期発見および予防し、より大きな運動適応を引き起こすためにも、運動に対する身体の適応過程のモニタリングが必要とされています。私の研究のメインアウトカムである起床時コルチゾール反応は、過負荷の運動に対して増加あるいは鈍化という二極性の変化を示します。そしてその変化の違いから、運動に対する身体の適応過程を反映している可能性が推察されており（Anderson and Wideman, 2017）、モニタリングの有力な指標として、近年徐々に研究が進められています。しかしながら、これまでの知見は、競技スポーツの現場で測定されたフィールドベースの研究のみであったため、起床時コルチゾール反応に影響を及ぼしうる多数の交絡因子が制御されておらず、かつ対象者が実際に完了した作業量も示されていませんでした。そのため、先行研究において示されている運動負荷が、実際に起床時コルチゾール反応に影響を及ぼしたかは明らかではありません。このような背景を踏まえて、本研究では起床時コルチゾール反応に影響を及ぼす運動負荷の条件の一端を条件統制下での実験から明らかにすることで、運動に対する起床時コルチゾール反応の変化について基礎的な知見を得ることを目的としました。先行研究のない中で、何から始めるべきかと手探りの状態でしたが、まずは先行研究の中で推察されていた（1）運動強度の閾値の存在と、先行研究において知見が不足していた（2）レジスタンス運動による影響の2つを検証することにしました。

研究1では、起床時コルチゾール反応が変化する運動強度の閾値の条件を明らかにするために、座位安静条件と、最大酸素摂取量の40%、60%、80%という異なる強度の運動条件が翌日の起床時コルチゾール反応に及ぼす影響について検討しました。その結果、座位安静条件と比較して、80%の運動を実施した条件において、翌日の起床時コルチゾール反応が高値を示しました。この結果から、起床時コルチゾール反応に影響を及ぼす運動強度の条件が、条件統制下の実験において初めて実証されました。研究2では、レジスタンス運動に対する起床時コルチゾール反応の変化を明らかにするために、多くのレジスタンス運動のプログラムで一般的に用いられている種目と負荷設定であるベンチプレス運動と最大挙上重量の75%の強度に着目し、翌日以降の起床時コルチゾール反応に及ぼす影響について検討しました。その結果、起床時コルチゾール反応が増加する

Responders と、変化なしあるいは鈍化する non-Responders に分かれることが明らかになりました。

発表後にご参加いただいた先生方から様々なご示唆やご質問をいただきました。その中でも、「起床時コルチゾール反応は競技スポーツの現場でどのように役立つのか？」という現場での応用に関する質問をいただいたことで、自分の研究の実践的な意義について改めて考えるきっかけになりました。実は、同じ質問を博士論文発表会の際にもいただいたのですが、起床後30分間（正確には、起床直後、15分後、30分後の3時点）という朝の貴重な時間を測定に費やさなければならないため、起床時コルチゾール反応を現場に応用することの難しさにずっと頭を悩ませていました。今回の発表でもこの問題は未解決で、ご質問いただいた際には上手く回答できませんでした。しかし、発表後に改めて考え直すことで、「唾液の採取という、対象者の努力が必要な方法を前提とするのではなく、もっと簡単かつ継続的に、コルチゾール濃度を測定できる方法があれば良いのでは？」というアイデアが浮かび、解決の糸口が見えてきた気がします。このアイデアが上手く形になるかはまだわかりませんが、現場への応用を目指す方法の一つとして、この課題に取り組んでいけたらと考えています。

現在は、自分の興味の原点でもある「運動が起床時コルチゾール反応に及ぼす影響と、そのメカニズムの解明」を目指して研究を進めています。運動によって生じる末梢組織の変化（例えば、骨格筋内のグリコーゲン量の減少や運動誘発性筋損傷）と、起床時コルチゾール反応の変化との関係に着目した検証を行っており、生体内の調和のとれた美しさに日々感動しています。研究室の立ち上げの大変さや、血液サンプルの採取を実験計画に組み込む難しさなど、色々な壁にぶつかることもありますが、学位論文への取り組みを通して出会えたこの研究と、これからも長く付き合っていきたいと思っています。

最後になりますが、今回、学位論文発表という貴重な機会をくださった先生方、企画・運営をしてくださった先生方、そしてご参加くださった先生方に心より感謝申し上げます。

著者略歴：大阪教育大学教育学部卒業、大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士前期課程、博士後期課程を経て博士（スポーツ科学）を取得。現在は大阪公立大学国際基幹教育機構にて特任助教として勤務。運動が起床時コルチゾール反応に及ぼす影響や、そのメカニズムに興味を持って研究を続けている。



V. 学位論文紹介



対人競技における決着の瞬間のメカニズムの解明
 — 剣道における同期現象と反応者優位の現象の手がかりに —
 川部宰也(中京大学)
 学位：博士（スポーツ科学）、授与機関：中京大学
 取得日：2026 年 3 月 19 日、指導教員：山田憲政教授

対人競技において、決着がつく瞬間が最も重要な局面である。さらに、決着の瞬間までには、それに至るまでの攻防、すなわち駆け引きを慎重に行うことが求められる。近年、駆け引きの重要性が認識され、先行研究では相対位相を指標とした同期現象により対人相互作用の特徴が明らかにされてきた。しかし、これらの研究は決着の前の安定した局面を対象としており、決着の瞬間の動きを定量的に捉えた研究は少ない。一方で、対人同期は二者が完全に同時に動くことを意味するものではない。対人競技には、先に動く「先導者」とその動きに応じて反応する「反応者」の役割的關係が存在すると考えられる。この関係は決着の瞬間にも見られ、反応者が勝利することがしばしばある。この現象を解明するために、主にボタン押しから検討され、運動時間(MT)は反応者の方が短いことが報告されている。しかし、このような実験状況では反応者が勝利する現象はほとんど観察されず、その一因として光刺激に基づく200msの反応時間(RT)が影響していると考えられている。以上のことから、決着を理解するには、駆け引きと決着を連続した過程として捉える視点が求められる。さらに、反応者が勝利する現象は先行研究と一致しない点も多く、反応者の運動特性をMTとRTの両側面から検討する必要がある。特に、光刺激に基づくRTが対人状況の応答特性を適切に反映しているかを、比較検討する必要がある。本研究では、対人競技における決着の瞬間について、相対位相に基づく二者の動きの關係(観点1)と反応者が先導者に勝る要因(観点2)に焦点を当て検討する。

第1章では上記2つの観点に関する先行研究を検討し、それらから問題点および課題を明らかにした。観点1では、対人競技中の二者の動きの關係が同期現象から検討されてきたことに着目した。剣道のような対一の対人競技に着目した先行研究では駆け引き局面の特徴を示すことに成功している。一方で駆け引きが成功しても攻撃が成功するとは限らない。したがって、駆け引きのみではなく、決着の瞬間までの一連の流れで検討する必要があると考えられた(課題1)。観点2では、反応者が勝利する現象について先行研究から課題を導出した。これまでの研究では、ボタン押しなどから検討され、MTは反応者の方が短いことが報告されてきた。一方で、競争的状況では先導者が勝利することが多いとされるが、実際の競技では反応者が勝利する現象も観察される。したがって、この矛盾を解明するためには、実際の競技を対象に実験的に再現する必要があると考えられた(課題2)。さらに、約200msのRTは光刺激に基づくものであるが、人の動きは連続的なアナログ情報として知覚される。したがって、対人というアナログな刺激状況における応答特性を明らかにし、光刺激に対するRTを基準とすることの妥当性を比較検討する必要があると考えられた(課題3)。

第2章は課題1を検討すべく、剣道競技における打突する瞬間までの駆け引きを、相対位相を指標として、同期状

態やその遷移パターンを分析することを目的とした。先行研究を参考に、同位相同期、逆位相同期、非同期を定義し、打突に至るまでの4秒間を対象に5区間に分割して分析を行った。その結果、全80試技中28試技において、打突前の2-1秒区間で逆位相同期となり、0.5秒-打突区間で同位相同期になるパターンを抽出した。これは全体の35%であり、打突動作の中に少なくとも1/3を説明しうる特定の同期パターンが存在することを定量的に示した。さらに、0.5秒-打突区間においては、従来の引き込みによる同期とは異なり、決着直前に新たに形成される同位相同期の存在が示唆された。

第3章は課題2と3を検討すべく、剣道競技を対象に二つの実験を設定し、反応者が先導者に勝利する要因をMTとRTから検討することを目的とした。第一実験では、カウンター攻撃を実験的に再現し、反応者が勝利することを検証するとともに、両者のMTの關係がボアの法則に従うかを確認した。対象者はフォースプレート上で互いに向かい合って構え、合図後に任意のタイミングで静止状態から面を打突した。先行研究を参考に定義した動き出しを基準として、MTは動き出しから打突まで、RTは両者の動き出しの差とした。その結果、先導者勝利は44試技中26試技、反応者勝利試技は18試技であった。さらに、MTは反応者の方が有意に短く、実際の競技においてもボアの法則に従うことが示された。なお、RTには差はなかった。第二実験では、LEDの点灯に反応する単純反応時間を測定し、第一実験の反応者勝利試技のRTと比較した。対象者はLEDの点灯に対して静止状態から面を打突した。RTはLED点灯から動き出しまでとした。その結果、第二実験のRTよりも第一実験の反応者のRTの方が有意に短かった。この結果から、対人状況ではより迅速かつ無意識的な反応が可能であることが示唆された。

第4章では、まず第2章および第3章で得られた結果を振り返り、剣道の決着の瞬間の二者の動きのメカニズムについて、2つの観点からそれに至る過程を整理した。そして、それらを総合的に考察することで、異なる2つの主要な勝利メカニズムが併存しうることを明らかにした。

第5章では、第4章の総合考察を踏まえ結論を以下のよう導いた。決着の瞬間には、「相手との同期パターンを形成・打破して勝利するメカニズム」と「反応者が相手の動き出しに対し、MT短縮(ボアの法則)を利用してカウンターで勝利するメカニズム」が存在する。本研究で得られたこの知見は、剣道をはじめとする対人スポーツにおける「決着の瞬間」を科学的に捉える新たな枠組みの基盤となるものである。

著者略歴：中京大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程修了。2026年3月同大学院にて博士号(スポーツ科学)を取得。現在、中京大学スポーツ科学部・任期制講師。

安定した自転車走行に関わる視線行動および身体動作

小嶋 岳 (大阪体育大学)

学位：博士 (体育科学)、授与機関：筑波大学

取得日：2026 年 3 月 25 日、指導教員：國部雅大助教

【背景と目的】

多くの人が習得する基本的な運動技能の一つに自転車走行がある。自転車走行では、四肢の協調的な運動に加え、環境に対する自己の定位を維持しながら走行することが求められる。このとき、定位に関わる主要な運動として、ハンドル操作である steering と車体の傾きを調整する frame roll が挙げられる (Doyle, 1987; Schwab et al., 2007)。また、感覚情報の中でも視覚は、自己の定位および移動方向の制御に重要な役割を果たすことが知られており、自転車走行において中核的な感覚であると考えられる。実際に、自転車走行中の視覚に着目した先行研究では、走行が困難な低速かつ狭い経路では視線が近方に向けられる一方で、走行が容易な広い経路では視線が経路のゴール地点に向けられることが示されており (Vansteenkiste et al., 2013)、課題難易度が視線行動に与える影響が知られている。しかしながら、これまで研究は主に視線単独に着目しており、視線行動および身体運動と安定した走行の関係については十分に明らかにされていない。そこで本研究の目的は、安定した自転車走行に寄与する視線行動および身体動作の特性を明らかにすることとした。この目的を達成するために、本研究では、安定性の評価のために自転車で狭い直線経路上を逸脱せずに走行する直線狭路課題を用いた (Fonda et al., 2017)。

【結果と考察の概要】

検討課題 1 では、測定に関する方法論的課題の解決と、安定した走行に関わる視線行動および身体動作の把握を目的とした。モーションセンサーを頭部に装着し、眼球運動測定装置と同期を行うことで、参加者間で比較可能な視線角度の算出を可能とした。重回帰分析の結果、小さな steering および上方への眼球位置が経路からの逸脱率の低さを有意に予測した。これにより、安定した走行には過剰な steering を抑制することに加え、視線を相対的に遠方に向けることが関与する可能性が示唆された。また、視線行動の詳細な分析の結果、19 名のうち 16 名において、前後方向に周期的に生起する眼球運動である視運動性眼振 (OKN) が観察された。

検討課題 2 では、直線狭路課題において特徴的に観察された OKN の抑制が走行に与える影響を検討した。自転車前方の一定距離に投射されたレーザーによる注視点を注視させた条件では、OKN の振幅が抑制されるとともに、経路からの逸脱が早期に生じた。この結果は、OKN が単なる副次的な現象ではなく、安定した自転車走行に機能的に関与している可能性を示唆する。

検討課題 3 では、視線方向の教示が身体動作および走行軌道に与える影響を検討した。近方、遠方の地面、および遠方の目線の高さに注視点を設定し、各条件で直線狭路課題を実施した。その結果、遠方に視線を向けた条件では、steering および頭部傾斜のばらつきが小さくなり、身体動

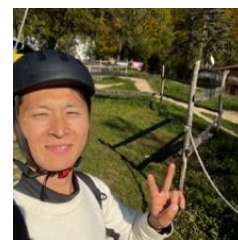
作の安定性が向上した。一方で、近方に視線を向けた条件では、経路からの逸脱が最も小さく、走行軌道の正確性が高まった。これらの結果は、視線距離の違いが運動制御の異なる側面に影響を及ぼすことを示しており、遠方は動作の安定化に、近方は位置精度の向上に寄与する可能性が示唆された。

検討課題 4 では、自転車技能の向上に伴う身体動作および視線行動の変化を検討した。参加者が未経験の Bicycle motocross を用い、1 ブロック 10 試行の練習を 1 日 2 ブロック、2 日間実施した。その結果、練習により経路からの逸脱が減少し、走行の安定性が向上したことが確認された。身体動作においては、steering と frame roll の相互相関が練習後に増大し、両者のばらつきが減少したことから、協調的な制御が強化されたことが示された。この結果は、運動学習において、まず身体動作の協調が形成され、その後に安定化が進むという Newell (1985) の段階モデルと整合的であると考えられる。

【まとめ】

4 つの検討課題を通して、以下の知見が得られた。まず、視線行動に関しては、変動の小さい安定した動作が求められる状況では遠方に視線を向けることが有効である一方で、正確な走行軌道が求められる状況では近方の走行経路に視線を向けることが重要であることが示された (検討課題 2, 3)。これらの結果は、視線距離の違いが運動制御の異なる側面に機能的に関与していることを示唆するものである。次に、身体動作に関しては、frame roll の方向に対して steering を行う協調的な運動が重要であり、さらに各動作の安定化が走行の安定性向上に寄与することが示された (検討課題 1, 4)。以上の結果から、安定した自転車走行は、視線行動と身体動作が課題要求に応じて柔軟に調整されることによって成立していると考えられる。

著者略歴:1995 年生まれ、宇都宮市出身。筑波大学 人間総合科学学術院 博士後期課程。自転車走行時の視覚や技能に関する研究を行ってきた。移動行動や熟練者の知覚について興味がある。



スポーツにおけるミスの捉え方とミスの影響の関係

周藤 玲奈 (広島大学)

学位：博士 (学術)、授与機関：広島大学

取得日：2026 年 3 月 23 日、指導教員：関矢 寛史教授

【背景と目的】競技場面においてミスは、敗北を決定づけたり、失点や劣勢を招いたりするだけでなく、その後のプレーにも悪影響を及ぼす (e. g., Harris et al., 2021)。ところが、なぜミス後にパフォーマンス低下が生じるのかについての検討は不十分である。さらにミスの影響と個人特性要因の関係は検討されていない。そこで個人特性要因としてミスの捉え方に着目した。ただし競技場面でのミスの捉え方の因子構造の検討は不十分である。以上を踏まえ、本博士論文の目的は、①ミスの影響を明らかにすること、②ミスの捉え方の因子構造を明らかにすること、③ミスの捉え方とミスの影響の関係を検討すること、の3点とした。

【方法と結果の概要】研究 1：目的③についてゴルフ非熟練者の大学生 29 名 (男性 14 名、女性 15 名) を対象にゴルフパッティング実験を行った。その結果、失敗に対してネガティブな価値観をもつほど、失敗後の試行におけるダウンスイング期のクラブヘッドの平均速度が遅かった。

研究 2：目的①についてラリーポイント制競技 (バレーボール、硬式テニス、卓球) の大学生競技者 12 名 (男性 6 名、女性 6 名) を対象としたインタビュー調査を行った結果、焦り、罪悪感、身体感覚の違和感、安全性を重視したプレーの選択などのネガティブな影響がパフォーマンス低下につながったことが報告された。一方で、モチベーションや集中力の向上などのポジティブな影響も報告された。

研究 3：目的①、②、③について、ラリーポイント制競技を対象とした質問紙調査を実施し、大学生競技者 267 名 (男性 146 名、女性 120 名、その他 1 名) から有効回答が得られた。探索的因子分析の結果、ミスの影響ではパフォーマンス低下、混乱、有益な効果、動作への悪影響、プレー回避欲求、安全性重視方略の 6 因子構造が、ミスの捉え方ではネガティブイメージ、不可避イメージ、ポジティブイメージの 3 因子構造が得られた。次にミスの捉え方とミスの影響の関係について、得られた因子を用いて共分散構造分析を行った結果、ネガティブイメージはネガティブな影響の因子と正の関連を示し、ポジティブイメージは有益な効果と正の関連を示した。また、ミスの捉え方についてクラスター分析を行い、ミスの影響の経験を比較した結果、ミスをポジティブなもの、仕方のないものと捉え、ネガティブなものとは捉えないという捉え方の組み合わせが、ミスの影響において有益である可能性が示唆された。

研究 4：多様な競技を対象に研究 2 と同様の目的・手順でインタビュー調査を行った。対象者はトライアスロン、硬式テニス、サッカー、フィールドホッケー、剣道の大学生競技者 8 名 (男性 5 名、女性 3 名) で、報告された影響

研究 5：多様な競技を対象に、研究 3 と同様の目的・手順で質問紙調査を実施した。大学生競技者 277 名 (男性 169 名、女性 107 名、その他 1 名) から有効回答が得られ、探索的因子分析の結果、ミスの影響では動作への悪影響、ネガティブ感情、安全性重視方略、有益な効果、回避欲求の

5 因子構造が、ミスの捉え方ではネガティブイメージ、成長可能性、ポジティブイメージ、軽視の 4 因子構造が得られた。共分散構造分析の結果は研究 3 と概ね同様であった。また、ミスの捉え方についてクラスター分析を行い、ミスの影響の経験を比較した結果、ミスを軽視せず、ネガティブなものとは捉えず、成長やポジティブな影響を導くものと捉えることが、ミスの影響において有益な捉え方の組み合わせである可能性が示唆された。

【まとめ】従来の研究ではミスの影響についての検討は不十分であった。研究 2・4 で得られたミスの影響は、あがり研究で報告された現象 (e.g., Murayama et al., 2010) と一致していた。これまで、ミス後の現象に着目してあがりが生じるかどうかを確認した研究は行われてこなかった。本論文は、ミスの影響を探索的に検討し、ミス後にあがりが生じる可能性を示した初めての研究となった。

また、これまでミスの捉え方の因子構造は明らかにされていなかったが、質問紙調査の結果、研究 3 ではネガティブイメージ、不可避イメージ、ポジティブイメージの 3 因子構造、研究 5 ではネガティブイメージ、成長可能性、ポジティブイメージ、軽視の 4 因子構造が得られた。

さらに、従来の研究ではミス後のパフォーマンス低下と個人特性要因の関連は十分に検討されてこなかったが、研究 1・3・5 において、ミスに対するネガティブな捉え方がミス後のネガティブな影響と関連することが示された。一方で、研究 3・5 においてミスをポジティブに捉えることがミス後のポジティブな影響と関連することも明らかとなった。さらに、これまで競技者を対象にミスの捉え方を測定した先行研究 (e.g., 安達・中山, 2017) では、ミスの捉え方の組み合わせにはどのようなものがあり、それが他の測定指標とどのような関係を示すのかについては検討されていなかったが、研究 3・5 において、例えばミスを仕方のないもの、ポジティブなものとは捉え、ネガティブなものとは捉えないという捉え方の組み合わせが、ミスの影響において有益である可能性が示された。

著者略歴：広島大学総合科学部卒業、広島大学大学院人間社会科学研究科修了。博士 (学術)。現在は、広島大学スポーツセンターにてスポーツアドミニストレーターとして勤務。

心理的要因に基づくスポーツ外傷・障害の受傷リスク評価法

田島勇人（日本大学人文科学研究所）

学位：博士（学術）、授与機関：日本大学

取得日：2026 年 3 月 25 日、指導教員：高橋正則教授

【はじめに】

スポーツ外傷・障害の受傷には様々な要因が考えられ、包括的モデル（Bahr and Krosshaug, 2005）によると、身体的要因や環境的要因のほかに心理的要因が挙げられており、受傷への関与が指摘されている。特にスポーツ外傷・障害の心理的な受傷プロセスを示すモデルとして、ストレス－傷害モデル（Andersen and Williams, 1988）がある。このモデルでは緊迫した競技場面に遭遇した時、生理的応答を引き起こし、スポーツ外傷・障害を受傷する危険性が増すと説明されている。

実際のスポーツ場面では、スポーツ外傷・障害の受傷を予防するため、様々な介入が行われる。心理的要因についても例外ではなく、例えば Gledhill et al. (2018) のシステムティックレビューでは、14 件の研究のうち 13 件で、心理的介入により、受傷件数の低下が報告されている。

このようにスポーツ外傷・障害の予防には積極的な介入が求められるが、適切な介入を行うには、適切な受傷リスクの評価を行うことが重要である。この評価方法については、一般的にメディカルチェックやフィジカルチェックなどが挙げられるが、近年では、デジタルデバイスの発展とともに、選手の運動負荷をモニタリングすることで疲労度や適応レベルなどを評価する Acute: Chronic Workload Ratio (ACWR) といった指標が用いられている。これらは主に身体的要因に対する評価であり、心理的要因を評価し、受傷リスクを評価するといった指標は見当たらない。

以上のように、スポーツ外傷・障害の受傷には心理的要因の関与が明らかにされ、介入により受傷リスクを低減させることが可能であるにもかかわらず、受傷リスクの評価指標がない現状を踏まえ、本研究の目的は、スポーツ外傷・障害の受傷と心理的要因との関係を検討し、心理的要因に基づく受傷リスクの評価方法を確立することとした。この目的を達成するために、3 つの研究課題を設定し、検討を行った。

【各研究課題の概要】

研究課題 1 では、大学スポーツ選手の受傷とメンタルヘルスの関係を捉え、ストレス－傷害モデルを基に心理的要因による受傷プロセスを明らかにした。t 検定、二項ロジスティック回帰分析、パス解析を行った結果、受傷にはメンタルヘルスを評価する心理的苦痛が直接影響を与えていた。また、心理的苦痛には日常や競技での人間関係などのストレスを介して、精神の安定・集中や協調性といった心理的スキルが影響していることが判明した。つまり、心理的スキルが低いとメンタルヘルスが不調となり、間接的に受傷リスクが高まるという心理的受傷モデルが構築された。

研究課題 2 では、大学男子テニス選手を対象として、受傷に影響を与える心理的競技能力を検討し、受傷リスクをスクリーニングするカットオフ値を求めた。心理的競技能力診断検査の分析後、ROC 曲線を描出した結果、受傷には

「精神の安定・集中」の下位尺度であるリラクセス能力が関係し、この得点が高いほど受傷確率が下がることが確認された。さらに、リラクセス能力が 9.30 点を下回る場合に受傷リスクが高いと判断するカットオフ値が得られ、心理的要因に基づく客観的な評価基準が確立された。

研究課題 3 では、Functional Movement Screen (FMS) を用いて身体的受傷リスクの低い選手（14 点以上）を抽出し、課題 2 で得られたカットオフ値の有効性と、心理状態の変動（ACWR）と受傷の関係を検証した。その結果、身体的リスクが低い場合でも、リラクセス能力がカットオフ値未満の選手は受傷リスクが高いことが確認され、同指標の有効性が示された。また心理状態に着目すると、一過的に安定度や快適度が高い状態や、継続的モニタリングにおいて活性度が急激に高まった際（活性度の ACWR 上昇時）に受傷しやすいことが明らかとなった。

【まとめ】

受傷には心理的要因のうち、特に心理的苦痛といったメンタルヘルスが直接影響し、また、心理的苦痛を調整する要因として、心理的スキルがストレスを介して影響を与えていた。さらに、心理的スキルのうち、特にリラクセス能力が受傷と関連しており、9.30 点を下回る場合、受傷するリスクが高いことが明らかとなった。他方、心理状態に着目すると、一過的に安定度や快適度が高い状態や、継続したモニタリングの中で活性度の ACWR が高い状態、つまり、活性度が急激に高まった際に受傷リスクが高まるということが明らかとなり、心理状態の把握が常に重要となる。一方で、研究の限界について、これまで外傷と障害の受傷プロセスは異なる可能性が指摘されている（Williams and Andersen, 1998; Tranaeus et al., 2014）が、本研究においては外傷と障害を区別して分析は行っていない。また、本研究では、受傷の定義を競技に影響のあった全ての怪我（all complaints injury; Clarsen and Bahr, 2014）とした。非常に軽微な受傷についても取り扱える一方、競技から離脱するに至らない外傷・障害も含まれる。今後はこれらについて、考慮することが望まれる。最後に、本研究の対象者は大学スポーツ選手で、特に大学テニス選手に着目した。したがって、今後は年齢や性別、競技種目といった観点から検証を行うことで、汎用性が高まることが期待される。

著者略歴：2021 年日本大学文理学部卒業、2023 年日本大学大学院文学研究科前期課程修了、2026 年同研究科博士後期課程修了。日本スポーツ心理学会認定 SMT 指導士、JSPO-AT 等の資格を有し、スポーツ現場においてサポートを行っている。



批判的思考態度を育む大学体育実技に関する実証的研究

鳥井淳貴（宝塚医療大学保健医療学部）

学位：博士（学校教育学）、授与機関：兵庫教育大学

取得日：2026年3月21日、指導教員：中須賀巧准教授

【研究の背景と目的】

身体活動や運動が心身の健康維持・増進に寄与することは多くの研究により明らかにされている（WHO, 2020；厚生労働省, 2013）。一方で、わが国における運動実施率は依然として低く、とりわけ大学生を含む若年成人層では、運動習慣を有しない者や改善意欲の低い者が一定数存在する（相澤ほか, 2014；厚生労働省, 2019）。このような「運動の重要性は理解しているが実践しない」という状況は、将来的な健康リスクの増大にもつながることが指摘されており、大学生期における運動行動の形成支援が重要な課題となっている。この課題に対し、大学における保健体育科目（以下、大学体育）は重要な役割を担う。大学体育は戦後の教育改革以降、一般教育科目として位置づけられ、身体的・精神的・社会的側面にわたる多面的な教育効果が指摘されてきた（全国大学体育連合, 2010）。一方で、大学設置基準の大綱化以降、体育の必修性をめぐる議論が続いており、その教育的意義の明確化が求められている（坂入, 1987；田崎, 2001）。さらに近年は、高等教育において学修成果の可視化やジェネリックスキルの育成が重視されており（中央教育審議会, 2018）、大学体育においても学習過程や成果を支える要因の解明が課題となっている。

本研究では、こうした課題を踏まえ、学習者の「批判的思考態度」に着目する。批判的思考は、論理的・合理的な基準に基づき、自己の思考過程を内省的に吟味しながら判断を行う思考様式であり（Ennis, 1987；楠見・道田, 2015）、その実践には態度的側面が重要な役割を果たす。特に、探究心や客観性、証拠の重視といった批判的思考態度は、知識や技能を実際の行動に結びつける基盤となる（平山・楠見, 2004）。運動行動が個人の価値判断に基づく選択的行為であることを踏まえると、批判的思考態度は運動習慣の形成や学修成果の獲得を支える心理的要因となる可能性がある。しかしながら、批判的思考態度に関する研究は主に教科学習を中心に蓄積されており（楠見ほか, 2011）、体育の文脈における実証的研究は限定的である。

以上より、大学体育における学習者の批判的思考態度に着目し、その育成に関わる要因および教育的条件について理論的・実証的に検討することを目的とした。

【結果の概要】

本研究では、大学体育における批判的思考態度の役割について、運動習慣形成、教育的要因、学修成果の三側面から多角的に検討した。研究1では、自己決定理論を枠組みとして、批判的思考態度と運動動機づけおよび運動継続への自信との関連を共分散構造分析により検討した。その結果、批判的思考態度は内発的動機づけおよび同一視的調整と正の関連、無動機づけと負の関連を示した。さらに、これらの自律的動機づけを媒介して運動継続への自信と関連する構造が確認され、批判的思考態度が運動行動の内在化を促進し、継続的实践を支える心理的基盤となる可能性が

示唆された。また、外的調整も運動継続への自信と関連することが認められ、多様な動機づけの在り方が行動維持に関与することが示された。次に、研究2では、大学体育における動機づけ雰囲気およびスポーツ経験と批判的思考態度との関連を、多母集団同時分析を用いて検討した。その結果、熟達雰囲気は一貫して批判的思考態度と正の関連を示し、課題への挑戦や振り返りを重視する学習環境が、思考態度の形成を促進することが明らかとなった。一方で、成績雰囲気との関連は限定的であり、競争的評価を強調する環境は必ずしも態度形成に寄与しない可能性が示唆された。最後に、研究3では、フラッグフットボール授業を対象に、学生の主観的恩恵評価と批判的思考態度との関連を共分散構造分析により検討した。その結果、批判的思考態度は身体的・心理的・社会的恩恵の実感と有意に関連していた。以上より、批判的思考態度は運動習慣の形成を支えるだけでなく、授業環境との相互作用を通じて学修成果の獲得にも関与する重要な要因であり、大学体育の教育的価値を支える中核的要素として位置づけられることが示唆された。

【まとめ】

本論文では、大学体育における学習者の批判的思考態度に着目し、その育成に関わる要因および教育的条件について理論的・実証的に検討することを目的とした。研究1では、批判的思考態度は運動動機づけの質を高め、自律的動機づけを通して運動継続への自信と関連する心理的基盤として位置づけられた。研究2では、熟達雰囲気を基盤とし、挑戦や振り返りを重視する授業環境、さらには学習経験の意味づけを促す指導的働きかけが、批判的思考態度の形成を支える重要な条件であることが示唆された。研究3では、批判的思考態度は主観的恩恵評価と有意に関連しており、大学体育で得られる身体的・心理的・社会的恩恵の実感を支える要因となる可能性が示された。これらの知見は、大学体育が身体的能力の向上にとどまらず、自律的に学び続ける力や生涯にわたる運動実践を支える内的基盤を育成し得ることを示唆するものである。ss

最後に、本研究は関連構造の解明にとどまるため、介入研究や縦断研究による因果的検証が今後の課題に挙げられた。

著者略歴：大阪体育大学体育学部卒業。兵庫教育大学大学院学校教育研究科修了。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科修了。現在は宝塚医療大学保健医療学部所属。



VI. 海外情報

2024 年 10 月から 2025 年 1 月末まで、オーストリアのウィーン工科大学に客員研究員として滞在しました。博士課程では自転車の知覚－運動技能に関する研究を行っており、VR 自転車シミュレータに関する論文を読んだことが、この研究室を知るきっかけとなりました。私自身、自転車走行中の操作ミスによって怪我をした経験があり、「怪我のリスクがない環境で自転車競技の練習ができれば」という単純な動機から訪問を決めました。実際に VR 自転車シミュレータを体験してみると、現実の走行感覚とは大きく異なり、当初予定していた研究計画を見直す必要があると感じました。受け入れ先の Florian Michahelles 先生に相談したところ、「まずは実際のマウンテンバイクコースを見てきたら？」と助言を受け、マウンテンバイクを借りてウィーン郊外のコースを下見に行きました。そのコースをモデルに、Unity 上で仮想コースを作成し、シミュレータ上での試走と改良を繰り返しました。連日のようにシミュレータ酔いに悩まされながらも、最終的には VR 自転車シミュレータのユーザー体験に関する実験を実施することができました。ウィーン滞在中は幸い自転車で怪我をすることはありませんでしたが、代わりにシミュレータ酔いと格闘する日々でした。

受け入れ先の研究室は Ubiquitous Computing の領域に属し、日常生活の中で人々がより自然かつ容易にコンピュータを利用できるようにすることを目的とした研究が行われていました。デバイス開発を行う情報工学を専門とする学生が 4 名、心理学を専門とする博士課程の学生が 1 名所属しており、工学と心理学の協働が欠かせない研究環境であることを実感しました。私が使用したシミュレータは、以前修士課程の学生によって作成されたものでした。これを機に、私自身も Unity で簡単なゲームを制作しながら C# を学びました。PhD 以上の研究者は 17 時前には帰宅するため、私は学部生が卒業研究のために夜な夜な研究室に集まる時間に合わせて、一緒にゲーム制作を学びました。Florian とは初めてお会いした際、「研究生活をサバイブする方法を教えてあげるよ」と言われ、滞在中は部屋の鍵を渡され、自由にデスクや機材を使わせてもらいました。海外で研究するために助成金申請書をいくつも書き、実験計画に頭を悩ませ、異国の地で研究を進める術を身につける貴重な経験となりました。

次に、2025 年 2 月から 2025 年 6 月末までオランダのアムステルダム自由大学に客員研究員として滞在しました。自転車の練習方法の比較についての論文を読み、こちらの研究室を知りました。受け入れ先の John van der Kamp 先生が持っていたアイデアをもとに自転車の学習方法の比較に関する実験を行いました。4 日間の学習実験であり、参加者の募集に苦労しました。こちらの大学では、大学 1 年生が単位を取得するために幾つかの実験に参加する必要が

ss ありました。このシステムを利用し、かつ大学内にポスターを貼り宣伝しました。最終的に多くの参加者が集まりましたが、参加者のスケジュールや連絡のマネジメントがとても大変でした。

John の研究室には、世界各国から多くの学生が PhD として滞在していました。John はとても気さくでありながら、学生と対等な立場で議論を行い、具体的な例や問いを通して新たな気づきを与えてくれる点が印象的でした。また、研究室の学生たちとは木曜や金曜の夕方に外のベンチでビールを飲むことが恒例で、良い思い出となっています。暖かくなる季節には「Enjoy the sun!!」と言って毎週のように乾杯していました。こちらの大学では、16 時頃には多くの教員や学生が帰宅し、金曜日には人が少なくなるなど、私生活と研究のメリハリがはっきりしていました。職員（PhD 以上）は自由にコーヒーマシンを使用できたり、学内の映画チケットが配布されたり、領域間の交流が月に数回開催されたりするなど、大学からのサポートも充実していました。また、大学の予算削減に対しては PhD 学生を含めた会議が頻繁に開かれ、学校運営への意識も高まりました。特に印象的だったのは、予算削減への抗議としてストライキが行われた際、John が校門で率先してビラを配っていたことです。

アムステルダムには、指導教員である國部雅大先生がいらっしゃいました。3 泊 4 日の滞在中、先生は朝から夕方まで常に実験を見守ってください、とても心強く感じました。実験で使用した自転車にも実際に挑戦していただきました。渡航前日に徹夜で PC の修復を行われたとのこと、宿に向かう途中で歩きながら眠っておられた先生の姿が印象に残っています。ご多忙の中お越しいただき、心より感謝申し上げます。

これらの研究室へは 4 月に連絡を取り、7 月にヨーロッパで開催された国際学会に参加した際に一度訪問し、10 月からウィーン、翌年 2 月からアムステルダムへの滞在を決定しました。長期滞在の許可申請などには時間を要するため、今振り返ると、予定の 1 年ほど前には連絡を取っておくべきだったと感じています。快く受け入れてくださった方々、そして送り出してくださった方々に心より感謝いたします。

著者略歴： 学位論文紹介を参照。



VII. 事務局報告

2025(R7)年度 体育心理学領域 第2回理事会 議事録

日時：2025(R7)年8月18日(月) 14:00～14:40

場所：WEB 会議システムによるオンライン開催

出席者：杉山佳生（会長）、兄井彰（理事長）、國部雅大、雨宮 怜、煙山千尋、工藤和俊、渋谷崇行、横山慶子、幾留沙智（理事）、長谷川弓子（監事）、小笠希将（幹事）、沖 和砂、木島章文（オブザーバー）

委任状提出：土屋裕睦、村山孝之

欠席者：奥村基生、荒木香織、森 司朗、田中美吏、筒井 香、樋口貴広

【報告事項】

1. 前回理事会（2024(R6)年度第1回理事会）議事録確認（事務局）（資料1）
兄井理事長より、資料1の確認依頼があった。会議終了までに理事からの疑義等はなく、承認が得られた。
2. 会員の異動、会費納入状況（事務局）
兄井理事長より、2025年4月時点で名誉会員22名と正会員572名が名簿に記載されていること、会費納入状況については、現在確認中である旨の報告があった。
3. 各種委員及び研究部会員（資料2）
兄井理事長より、2025・2026年度の各種委員及び研究部会員の推薦について報告があり、政策検討・諮問委員に石倉忠夫氏（同志社大学）、若手研究者委員に雨宮理事、応用研究部会委員については、新たに尼崎光洋氏（愛知大学）、幾留理事、渋谷理事を推薦したことが報告された。
4. 会報37号（通巻65巻）の発行（広報委員会、事務局）
兄井理事長より、会報が8月12日からホームページで公開されている旨の報告があった。また、理事会後に、会報の発行を会員にメール周知する旨が確認された。
5. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会について（学会大会委員会、事務局）（資料3）
兄井理事長より、日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会が、2025年8月27日(水)、28日(木)、29日(金)に日本体育大学東京・世田谷キャンパスで開催され、当領域では、口頭発表6題、ポスター発表79題、キーノートレクチャー2題が予定されている旨の報告があった。また、理事会に出席の応用研究部会の部会員より、研究部会の内容について紹介された。
6. 大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会 発表準備助成
兄井理事長より、2名の大学院生の助成が行われた旨の報告があった。
7. 日本体育・スポーツ・健康学会第76回について（事務局、学会大会委員会）
兄井理事長より、日本体育・スポーツ・健康学会第76回大会が、2026年8月31日(月)、9月1日(火)、2日(水)に北翔大学にて開催される旨の報告があった。
8. その他
國部理事より、学位論文発表企画がサテライトで実施され、2名の各企画につき20名程度の参加があった旨が報告された。

【審議事項】

1. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回のキーノートレクチャー、司会、座長への謝金について（資料4）
兄井理事長より、学会大会でのキーノートレクチャー講師2名に10,000円ずつの講演料、同司会2名に5,000円ずつの謝金、加えて口頭発表の座長1名に5,000円の謝金を支払うこと、さらに各者に支払う金額に第38号会報に掲載する報告原稿料が含まれる旨の提案があった。これら全ての提案が承認された。また、他領域と合同でシンポジウムを実施する場合に備えた検討の必要性が確認された。
2. 2026(R8)年度事業計画案（資料5）
兄井理事長より、2026年度の事業計画案について説明がなされ、承認された。
3. 2026(R8)年度予算案（資料6）
幾留会計担当理事より、2026年度の予算案の説明がなされ、承認された。なお、専門領域会報関連費用の謝礼（会報発行作業補助）については、理事・事務局の交代により1年目の場合は補助が必要になる可能性があるため、1年目の予算には計上することが確認された。
4. その他
なし。

2025 (R7) 体育心理学専門領域総会議事録

日時：2025 年 8 月 29 日 (金) 9:00～10:00

会場：日本体育大学 1202 教室

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

III. 議長選出

高井秀明氏 (日本体育大学) が選任され、承諾を得た。

IV. 報告事項

1. 2025 年度事業について

(1) 理事会

兄井理事長より、以下の 2 回を開催した旨の報告があった。

- 2025 年 4 月 11 日 (金) 第 1 回理事会開催 (オンライン)

- 2025 年 8 月 18 日 (月) 第 2 回理事会開催 (オンライン)

(2) 学術／社会貢献企画 (中高生・市民のための入門講座 (日本スポーツ心理学会との合同企画))

兄井理事長より、体育心理学専門領域 HP に掲載されている通り、2025 年 8 月 29 日までに 2 題の動画が配信されている旨の報告があった。

(3) 体育心理学専門領域会報第 37 号発行

兄井理事長より、2025 年 8 月 10 日付で体育心理学専門領域 HP 上に掲載された旨の報告があった。

(4) 日本体育学会第 75 回大会における専門領域の活動

兄井理事長より、口頭発表 6 題、ポスター発表 79 題、キーノートレクチャー 2 題の発表が予定されている旨の報告があった。

(5) 大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 発表準備助成

兄井理事長より、大学院生 2 名が採択された旨の報告があった。

(6) 研究会等活動支援

兄井理事長より、2025 年 9 月 30 日締切で募集が行われた旨の報告があった。

(7) 学位論文発表企画

兄井理事長より、2025 年 7 月 29 日および 8 月 4 日に、各 1 題の発表があった旨の報告があった。

2. 会員異動

兄井理事長より、2025 年 4 月時点において、名誉会員 22 名、正会員 572 名であった旨の報告があった。

3. 2026 年度名誉会員の推薦について

兄井理事長より、2026 年度の日本体育・スポーツ・健康学会名誉会員について、本部理事会から、体育心理学専門領域に所属する会員の中に該当者がいなかった旨の報告があった。

4. 2025・2026 年度日本体育・スポーツ健康学会専門領域選出代議員の選挙結果

兄井理事長より、オンライン選挙が行われ、投票率が体育心理学専門領域で 14.5%、専門領域全体で 21.2%であったこと、さらに荒井弘和氏、工藤和俊氏、田中ウルヴェ京氏の 3 名が代議員に選出されたとの報告があった。

5. 各種委員会委員

兄井理事長より、資料 1 に示した各種委員が選出されたことについて報告があった。

6. 日本体育・スポーツ健康学会第 76 回大会

兄井理事長より、2026 年 8 月 31 日 (月) から 9 月 2 日 (水) まで、北翔大学において開催される旨の報告があった。

7. その他

V. 審議事項

1. 2024 年度 (令和 6 年度) 決算報告.

兄井理事長より、資料 2 の説明・提案があり、承認された。

2. 2026 年度事業計画案

兄井理事長より、下記の 9 事業を計画しているとの説明・提案があり、承認された。

(1) 日本体育・スポーツ・健康学会第 76 回大会の体育心理学専門領域の企画・運営

(2) 学術／社会貢献企画 (中高生・市民のための入門講座 (日本スポーツ心理学会との合同企画) 等)

(3) 役員選挙 (会長・理事)

(4) 会報第 38 号 (通巻 66 巻) の発行

(5) 理事会 (4 月頃、8 月頃)

(6)総会（9月）

(7)大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会第76回大会発表準備助成

(8)研究会等活動支援

(9)学位論文発表企画

3. 2026年度予算案（資料3）

兄井理事長より、資料3の説明・提案があり、承認された。

4. その他

VI. 議長退席

VII. 閉会の辞

2025・2026 年度 体育心理学専門領域 役員選挙結果 報告

開票日：2024 年 7 月 4 日（木）17:00～18:00

場所：株式会社エム・イー・シー投票システム i-vote

立会人：兄井彰・木島章文・中本浩揮・中須賀巧

投票率：13.8% [会員数 572 名，投票用紙送付 572 名，投票数 79]

会長選挙：全票数 572，投票数 80，有効票 79，無効票 1

理事選挙：全票数 2,860，投票数 395，有効票 382，無効票 13

選挙結果（以下，敬称略）

会長（1 名）

杉山 佳生

理事（五十音順）

兄井 彰

雨宮 怜

荒木 香織

幾留 沙智

奥村 基生

工藤 和俊

國部 雅大

渋谷 崇行

土屋 裕睦

横山 慶子

令和5年度決算報告

令和5年度決算報告(自 令和5年4月 至 令和6年 3月)

○収支決算書

令和5年度繰上予算案

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)		1,145,325	1,275,332	△ 130,007
前期繰越収支差額		1,286,082	1,286,082	0
収入合計(B)		2,431,407	2,561,414	△ 130,007
支出の部				
当期支出合計(C)		1,066,805	801,780	265,025
次期繰越収支差額(B) - (C)		1,364,602	1,759,634	△ 395,032
支出合計		2,431,407	2,561,414	△ 130,007

○収入の部

款	項目	予算	決算		備考
・前年度繰越金		1,286,082	1,286,082	0	
・年会費		1,000,000	1,130,000	△ 130,000	2千円×565名(3月19日現在)
・郵便貯金(利息)		7	14	△ 7	
・体育学会専門領域補助金		145,318	145,318	0	
・令和5・6年度代議員選挙送費		0	0	0	
○収入合計(B)		2,431,407	2,561,414	△ 130,007	

○支出の部

款	項目	予算	決算		備考
・専門領域会報関連費用	小計	307,665	260,635	47,030	第35号発行および第36号作成
	会報編集費等	137,665	137,665	0	第35号印刷費+振込手数料
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	122,970	27,030	第35-36号(24名)+振込手数料
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	220,000	66,650	153,350	第73回大会
	司会・演者謝礼	60,000	51,155	8,845	演者2名, 司会者6名+振込手数料
	会員外交通費補助	0	0	0	
	国際会議関連費	0	0	0	
	セミナー(プレ、ランチョン)費用	60,000	0	60,000	
	大学院生学会参加助成	100,000	15,495	84,505	5,000円×3件+振込手数料
・研究会活動支援金	小計	191,000	211,090	△ 20,090	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	120,595	△ 20,595	20,000円×6件+振込手数料
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	90,495	505	30,000円×3件+振込手数料
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,100	△ 100	積立+振込手数料(100円)
・令和5・6年度役員選挙実施費	web選挙費用	0	0	0	web選挙費+振込手数料
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	0	50,000	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	30,000	0	30,000	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,305	△ 165	HP管理費+振込手数料(165円)
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,066,805	801,780	265,025	
・予備費(B)-(C)		1,364,602	1,759,634	△ 395,032	
○支出合計		2,431,407	2,561,414	△ 130,007	

△は超過

令和5年度特別会計決算報告(自 令和5年4月 至 令和6年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)	令和5年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金(利息)		7	14	△ 7
前期繰越収支差額		1,800,059	1,800,059	0
収入合計(B)		2,000,066	2,000,073	△ 7
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B) - (C)		2,000,066	2,000,073	△ 7
支出合計		2,000,066	2,000,073	△ 7

*会員数昨年度581名から587名へと6名増(名管会員21名含む、令和6年3月19日現在)

令和6年 3月 31日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

森 司朗 (印)

横山 慶子 (印)

2024(令和6)年度補正予算案

令和6年度予算案(自 令和6年4月 至 令和7年 3月)

○収入の部					
↓令和6年度の予算案					
款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,364,602	1,759,634	395,032	昨年度決算を反映
・年度会費		1,000,000	1,000,000	0	2千円×500名
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・体育学会専門領域補助金		145,318	146,970	1,652	今年度入金分
・当期収入合計(A)		1,145,325	1,146,977	1,652	
○収入合計(B)		2,509,927	2,906,611	396,684	

△はマイナス

○支出の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	320,000	307,500	△ 12,500	第36号発行および第37号作成
	会報編集費等	150,000	137,500	△ 12,500	第36号発行・編集費
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	150,000	0	
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会/特別企画関連経費	小計	220,000	120,000	△ 100,000	
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	セミナー・ランチョンイベント費用	60,000	60,000	0	オンライン学位論文紹介の謝金を含む
	大学院生学会参加助成	100,000	0	△ 100,000	学会大会の参加助成制度のため
・研究会/社会貢献活動支援費	小計	191,000	191,000	0	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	100,000	0	
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	91,000	0	1名につき3万円
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	web選挙費用	300,000	381,257	81,257	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会、委員会開催費用	30,000	30,000	0	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,140	0	HP管理費
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計(C)		1,379,140	1,347,897	△ 31,243	
・予備費(B)－(C)		1,130,787	1,558,714	427,927	
○支出合計		2,509,927	2,906,611	△ 396,684	

△はマイナス

令和6年度特別会計予算案(自 令和6年4月 至 令和7年 3月)

○収入の部					
款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		2,000,066	2,000,073	7	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		2,200,073	2,200,080	7	

○支出の部

款	年度	予算案	補正予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)－(C)		2,200,073	2,200,080	7	
○支出合計		2,200,073	2,200,080	7	

2025(令和7)年度予算案

令和7年度予算案(自 令和7年4月 至 令和8年 3月)

○収入の部

↓ 令和6年度の補正予算案

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,759,634	1,558,714	△ 200,920	
・年度会費		1,000,000	1,000,000	0	2千円×500名
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・体育学会専門領域補助金		146,970	146,970	0	
・当期収入合計(A)		1,146,977	1,146,977	0	
○収入合計(B)		2,906,611	2,705,691	△ 200,920	

△はマイナス

○支出の部

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	307,500	320,000	12,500	第37号発行および第38号作成
	会報編集費等	137,500	150,000	12,500	第38号発行・編集費
	原稿料	150,000	150,000	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会/特別企画関連経費	小計	120,000	220,000	100,000	
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	セミナー・ランチョンイベント費用	60,000	60,000	0	
	大学院生学生会参加助成	0	100,000	100,000	
・研究会/社会貢献活動支援費	小計	191,000	191,000	0	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	100,000	0	
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	91,000	0	1名につき3万円
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	web選挙費用	381,257	0	△ 381,257	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会、委員会開催費用	30,000	30,000	0	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,140	0	HP管理費
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計(C)		1,347,897	1,079,140	△ 268,757	
・予備費(B)－(C)		1,558,714	1,626,551	67,837	
○支出合計		2,906,611	2,705,691	200,920	

△はマイナス

令和7年度特別会計予算案(自 令和7年4月 至 令和8年 3月)

○収入の部

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		2,000,073	2,200,080	200,007	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		2,200,080	2,400,087	200,007	

○支出の部

款	年度	前年度予算	予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)－(C)		2,200,080	2,400,087	200,007	
○支出合計		2,200,080	2,400,087	200,007	

2026（令和8）年度 体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録

日時：2026（令和8）年4月7日（火）11:00～11:50

場所：Web 会議システムによるオンライン開催

出席者：杉山佳生（会長）、兄井 彰（理事長）、雨宮 怜、荒木香織、幾留沙智、煙山千尋、國部雅大、工藤和俊、渋谷崇行、土屋裕睦、村山孝之、横山慶子（以上、理事）、長谷川弓子、森 司朗（以上、監事）、小笠希将（幹事）、尼崎光洋、沖和砂（以上、オブザーバー）

欠席者：奥村基生（理事）、筒井香（オブザーバー）

【報告事項】

1. 2025 年度第2回理事会及び総会議事録の確認（事務局）〈報告1の資料〉
兄井理事長より、資料の確認依頼があった。会議終了までに理事から疑義等はなく、承認が得られた。
2. 会員の異動（事務局）
兄井理事長より、2026年4月1日時点で、会員533名であり、昨年4月1日と比較して39名減少したことが報告された。
3. 会報第38号（通巻66号）の準備状況（広報委員会、事務局庶務担当）
横山事務局庶務担当理事より、現時点で原稿は概ね収受されていることが報告された。
4. 日本体育・スポーツ・健康学会第76回大会について（学会大会委員会、事務局）〈報告4の資料〉
國部理事より、学会大会が、2026年8月31日、9月1日、9月2日に札幌コンベンションセンターおよび北翔大学で開催される予定であること、キーノートレクチャーに上野雄己氏（東京大学）と長谷川弓子監事（中京大学）がご登壇いただく予定であること等が報告された。
5. 社会貢献イベント（中高生・市民のためのスポーツ心理学入門講座）の実施状況（事務局）〈報告5の資料〉
兄井理事長より、過去の実施状況が報告された。
6. その他
特になし。

【審議事項】

1. 2025 年度決算案（事務局会計担当）〈審議1の資料〉
幾留事務局会計担当理事より、2025年度の決算に関する説明があり、承認された。
2. 2026 年度事業計画案の確認（事務局）〈審議2の資料〉
兄井理事長より、事業計画案が提案され、承認された。
3. 2026 年度大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会参加助成について〈審議3の資料〉
兄井理事長より、例年と同様に大学院生に対する学会参加助成を実施する案が提案され、承認された。
4. 2026 年度研究会助成について（事務局）〈審議4の資料〉
兄井理事長より、例年と同様に研究会助成を実施する案が提案され、承認された。
5. 学位取得者のオンライン発表について（学会大会委員会、事務局）〈審議5の資料〉
國部学会大会委員より、学位取得者のオンライン発表について、今年度は学会大会後に実施する案が提案され、承認された。
6. 2027-2028 年度会長及び理事選挙について〈審議6の資料〉
兄井理事長より、役員選挙を実施すること、その方法については今回よりオンラインで実施する案が提案され、承認された。
7. 日本体育・スポーツ・健康学会と関連学会間の情報共有基盤の構築について〈審議7の資料〉
兄井理事長より、会員に一般的に公開されている内容について情報共有する方針が示され、承認された。
8. 自然災害等のやむを得ない事情により学会大会の企画が中止となった場合の代替開催について〈審議8の資料〉
國部理事より、学会大会の企画が中止となった場合は「各演者の先生の希望を優先して回答する」とする案が提案され、承認された。
9. その他
杉山会長より、学位取得者によるオンライン発表の謝金については、専門領域会報関連費用内の原稿料ではなく学会大会関連経費内のセミナー費用として計上する案が提案され、承認された。

令和7年度決算報告

令和7年度決算報告(自 令和7年4月 至 令和8年 3月)

○収支決算書

令和7年度予算案

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)		1,146,977	1,192,151	△ 45,174
前期繰越収支差額		1,558,714	1,813,255	△ 254,541
収入合計(B)		2,705,691	3,005,406	△ 299,715
支出の部				
当期支出合計(C)		1,079,305	680,050	399,255
次期繰越収支差額(B)－(C)		1,626,386	2,325,356	△ 698,970
支出合計		2,705,691	3,005,406	△ 299,715

○収入の部

款	項目	予算	決算		備考
・前年度繰越金		1,558,714	1,813,255	△ 254,541	
・年度会費		1,000,000	1,044,000	△ 44,000	2千円×522名分
・郵便貯金(利息)		7	2,760	△ 2,753	
・体育学会専門領域補助金		146,970	145,391	1,579	
・令和6・7年度代議員選挙送費		0	0	0	
○収入合計(B)		2,705,691	3,005,406	△ 299,715	

○支出の部

款	項目	予算	決算		備考
・専門領域会報関連費用	小計	320,000	266,130	53,870	第37号発行および第38号作成
	会報編集費等	150,000	137,665	12,335	第37号印刷費＋振込手数料
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	128,465	21,535	第37-38号(23名)＋振込手数料
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	220,000	40,825	179,175	第75回大会@日体大
	司会・演者謝礼	60,000	30,495	29,505	演者2名, 司会2名＋振込手数料
	会員外交通費補助	0	0	0	
	国際会議関連費	0	0	0	
	セミナー(プレ, ランチョン)費用	60,000	0	60,000	
	大学院生学会参加助成	100,000	10,330	89,670	5,000円×2名＋振込手数料
・研究会活動支援金	小計	191,000	109,790	81,210	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	49,460	50,540	3件＋振込手数料
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	60,330	30,670	30,000円×2件＋振込手数料
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・令和7・8年度役員選挙実施費	web選挙費用	0	0	0	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	0	50,000	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	30,000	0	30,000	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,305	63,305	0	HP管理費＋振込手数料
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,079,305	680,050	399,255	
・予備費(B)－(C)		1,626,386	2,325,356	△ 698,970	
○支出合計		2,705,691	3,005,406	△ 299,715	

△は超過

令和7年度特別会計決算報告(自 令和7年4月 至 令和8年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)	令和7年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金(利息)		7	2,923	△ 2,916
前期繰越収支差額		2,200,352	2,200,352	0
収入合計(B)		2,400,359	2,403,275	△ 2,916
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B)－(C)		2,400,359	2,403,275	△ 2,916
支出合計		2,400,359	2,403,275	△ 2,916

*会員数昨年度572名から548名へと24名減(2026年3月31日退会の11名を含む)

令和8年 3月 31日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

森 司朗

長谷川 3子

2026(令和8)年度予算案

令和8年度予算案(自 令和8年4月 至 令和9年 3月)

○収入の部

↓ 令和7年度の予算案

款	項目	前年度予算案	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,558,714	1,626,551	67,837	
・年度会費		1,000,000	1,000,000	0	2,000円×500名
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・体育学会専門領域補助金		146,970	150,000	3,030	
・当期収入合計(A)		1,146,977	1,150,007	3,030	
○収入合計(B)		2,705,691	2,776,558	70,867	

△はマイナス

○支出の部

款	項目	前年度予算案	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	320,000	300,000	△ 20,000	第38号発行および第39号作成
	会報編集費等	150,000	150,000	0	第39号発行・編集費
	原稿料	150,000	150,000	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	△ 20,000	
・学会大会/特別企画関連経費	小計	220,000	220,000	0	
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	セミナー・ランチョンイベント費用	60,000	60,000	0	
	大学院生学会参加助成	100,000	100,000	0	
・研究会/社会貢献活動支援費	小計	191,000	191,000	0	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	100,000	0	
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	91,000	0	1名につき3万円
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	web選挙費用	0	400,000	400,000	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会、委員会開催費用	30,000	30,000	0	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,140	0	HP管理費
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計(C)		1,079,140	1,459,140	380,000	
・予備費(B)－(C)		1,626,551	1,317,418	△ 309,133	
○支出合計		2,705,691	2,776,558	70,867	

△はマイナス

令和7年度特別会計予算案(自 令和7年4月 至 令和8年 3月)

○収入の部

款	項目	前年度予算案	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		2,200,352	2,400,359	200,007	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		2,400,359	2,600,366	200,007	

○支出の部

款	年度	前年度予算案	予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)－(C)		2,400,359	2,600,366	200,007	
○支出合計		2,400,359	2,600,366	200,007	

VIII. 編集後記

編集後記

体育心理学専門領域分科会会報第 38 号をお届けするにあたり、本号への執筆にご協力いただきました先生方に御礼申し上げます。また、庶務担当理事の横山慶子先生（名古屋大学）には、編集作業をご担当いただき深く感謝申し上げます。

本会報には、日本体育・スポーツ・健康学会 75 回大会の内容をはじめ、研究会の活動報告、研究室紹介、サテライト企画（学位論文発表）、学位論文紹介、そして海外情報が掲載されています。スポーツ、運動部活動、および健康福祉の場面における研究が主に掲載されていますが、本領域である体育の場面における研究結果の共有が少ないため、今後に期待したいと思います。また、対象者に焦点を当てると、アスリートを対象とした研究が突出して多く、コーチについての発表も含まれます。今後は、アスリートとコーチ以外にスポーツの場面で活動する専門家にも焦点を当てた研究の情報共有を心待ちにしたいと思います。また、著者の 3 分の 1 程度が女性であることは、本領域においての多様性の現状を反映しています。今後も皆さまの女性研究者へのサポートおよび機会の提供を望みます。

本領域の発展は、会員の皆さまのご活躍を通して、より一層推進されるものと確信しております。次号におきましても、皆さまの充実した研究活動にふれることができることを期待しております。

広報委員会委員長 荒木 香織

日本体育・スポーツ・健康学会体育心理学専門領域会報 第 38 号（通巻第 66 号）

発 行 令和 8 年 8 月 10 日 発行（非売品）
発行責任者 兄井 彰（代表）
発 行 所 日本体育・スポーツ・健康学会体育心理学専門領域事務局
〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1 福岡教育大学
TEL 0940-35-1448
E-mail : taiiku_shinri@ihs.kyushu-u.ac.jp
URL : <https://www.psychology-jspehss.jp>

印 刷 株式会社ネクストビジョン
